

湯浅氏文献 19) : p30,56 [使用している部分は囲み]

p30・p56

篠田氏の虚偽の声明発表

― ナイロンザイル事件の前段終了する

三十三年十月十六日、第二回公開質問状発送、十月二十二日、篠田氏の声明が新聞、ラジオで発表された。要旨は「三十年四月二十九日の公開実験は、グライダー、船舶の曳航繩に関するものであり、登山とは無関係」というものであった（篠田氏のこの声明は、現在まで少なくとも七回、新聞で報道されており、45頁の報知新聞参照―報道機関にはそのときの録音テープが残されているということである）。

三十三年十一月七日、第三回公開質問状の発送について三十四年八月三十日、「ナイロンザイル事件に終止符を打つにさいしての声明」(二〇頁)を発表した。要旨「篠田氏の十月二十二日の声明はとんでもないウソである。これがウソであることは、万人の認めるところである。それどころか篠田氏自身、学会報告書の中で、蒲郡実験は、前穂高での岩稜会の遭難原因究明のためのものであったと記していられる。私たちは、蒲郡実験での篠田氏の行為が、もしも良心的であるということならば、一般大衆の

関西支部長篠田氏は、三十年四月二十九日、ナイロンザイルが岩角にかかった場合でも麻ザイルの教倍強いという実験を公開した。また前穂高で発生した遭難事故と同一条件という実験がなされ、ハミリナイロンザイルは切れなかった。そのため若山君の死因に関し大きな疑惑が生れた。しかし公開実験でこのような結果が出たのは、実験に使った岩角が丸くしてあったためである。また篠田氏は同実験前に、ナイロンザイルが岩角できわめて弱い実験を行っていたが、今でもそれは発表されていない。もしこの欠陥を示す実験が発表されていれば、今回の神戸大学生の事故も防止できていたかもしれない」というものであった。(48頁参照)

生命を守るうえに重大な支障をきたすと考え、良心的でなかったことを客観的に明らかにすべく、これまで努力してきたが、今回の篠田氏のウソの発表によって、その点が明白になったと考える。また篠田氏自身反省していられるにちがいない。従って私たちは、私たちの目的を、最小限ではあるが達しえたと思うので、この事件に終止符をうつことにした。しかし篠田氏がこの声明に反論されるならば、どこまでも続けるであろう」というものである。結局、反論なく、ナイロンザイル事件に終止符をうったのである。この声明も大々的に報道された。結局、篠田氏のこの明白なウソによって「篠田氏の蒲郡実験における不可解な行動は、篠田氏が企業に買収されたためである」という説明以外にはない」と三十三年七月発行の「岩と雪」1号に記したことがはっきりと証明された。篠田氏は、ウソなくしてはこれに反論できなかったからである。同時に、このウソの発表によって石原の名譽毀損罪による告訴は、成立すべきものであったことが明らかとなった。同時に、非力な私たちはこの状態をもって、不満足ながらも正しい解決を得たとしてナイロンザイル事件を終結させたのである。

声明書を各方面に発送し、多くの人々からねぎらいの手紙をいただいたが、とくに今西錦司氏から「長期にわたる抵抗、ほんとうによく戦かわれました。ご苦労様でした。敬意を表します」という書面をいただいた(今西氏の書面公表のこと、今西氏の了解済み)。

ザイル業者の注意義務欠除―

「山日記」の影響拡がる

ここでナイロンザイル事件の、いはば前期が終了し十年の歳月が流れる。しかしこの間、ザイル業者はザイルの販売にさいして、ザイルに添付するカードには、前記したように、切断はありえないことを思わせる数字のみ

年月日		事項
1865・7・14		ウィンパー等七名、マッターホーン初登攀の下山に際してザイル切断、四名墜死、ザイル切断原因究明のためのスイス政府の委員会設立等、ザイル事件発生する。
昭28・8・20		「山岳」第四八年、金坂一郎氏は確論で、ナイロンザイルは麻ザイルの数倍強いという記事発表する。
29・		東洋レーヨンパンフレットに「命の綱」という見出しで「電気工夫が用いるナイロンの安全帯はガサガサの電柱とか金属性の桁の縁ともすれあうが、ナイロンは普通の帯の三倍も強い」と記載する（後述のヤスリ実験と逆のデータ）。
29・6・25		「登山技術と用具」西岡、海野、諏訪多三氏共著で「ナイロンザイルは麻の欠点をすべてカバーしている。太さが細くなり軽くなるから有難い」と記載する。
29・8・1		「山と溪谷」諏訪多蔵氏執筆「ナイロンザイルが優秀であることは万人の認めるところである。まず軽くて強い。このことは岩登りはもちろん、積雪期登山において実に魅力である」と記載する。
29・12・		岩稜会の責任者石岡繁雄は、運動具店主熊沢友三郎氏から八ミリナイロンザイル八〇mを購入する。
29・12・28		東雲山溪会員一名、穂高明神岳で墜落重傷、九ミリナイロンザイル切断。
30・1・2		岩稜会員三名（石原、沢田、若山五朗）前穂高で遭難、若山墜死、八ミリナイロンザイル切断する。
30・1・3		大阪市立大学山岳部員一名前穂高で墜落、軽傷、一一ミリナイロンザイル切断する。
昭30・1・11		リナイロンザイル切断する。
30・1・12		石岡は、中日新聞に岩稜会の遭難状況の詳細とナイロンザイルの岩角欠陥の仮説を発表する。
30・1・13		前記熊沢氏は、前記沢田に「ザイルは切れたのではなくて、結び目がほじたのではないか」という意味の書面を送る。
30・1・15		朝日新聞は、石原、沢田の体験談を発表する。
30・1・17		朝日新聞「今日の問題」の欄で「切れたザイル」という見出しで「原因を徹底的に究明せよ、保証付ザイルとは何を保証したかを明らかにせよ」と発表する。
30・1・31		NHK第一放送「私たちの言葉」で若山五朗の父は「息子は新製品の試験台となって、あたら若い生命を失った」と全国に放送した。
30・1・31		石岡は、名古屋大学工学部土木教室で、ナイロンザイルがエッジにきわめて弱い実験を行なう。
30・2・9		日本山岳会関西支部主催のナイロンザイル切断検討会開催される。日本山岳会関西支部長大阪大学教授篠田軍治氏は、原因究明のための研究に着手することを表明。石岡、名大土木研究室で行った実験を発表する。
30・2・		石岡は、木製架台のザイル実験装置を製作。エッジを介しての衝撃実験を行う。
30・3・1		「山と溪谷」と「岳人」は、岩稜会の遭難状況とナイロンザイルの岩角欠陥の仮説を発表、「岳人」はその記事に「世にも不思議な出来事」という見出しをつける。また「山と溪谷」は、篠田氏の実験を予告する。
30・1・31	3・上旬	東洋レーヨンと東京製綱の代表と若山五朗の遺族との会談、決裂する。

昭33・11・25	33・12・	33・12・20	33・12・22	34・7・30	34・8・30	34・9・12	34・10・4	34・11・1	36・10・3	38・7・16	38・8・11
「岩と雪」IIで石岡は「その後のナイロンザイル事件」を発表する。	「ナイロンザイル事件」関係の資料が長野県大町市、山岳博物館に展示される。	大町市立山岳博物館機関誌「山と博物館」で、海川庄一氏は「ナイロンザイル事件」を詳細に発表する。	石原らは、篠田氏に対し、蒲郡実験に関し謝罪広告することを内容証明で催告した。	梶原信男著篠田氏監修の「ザイル・強さと正しい使い方」が発行される。蒲郡実験のデータ一六四種類発表される(しかし、この書には重大な矛盾がある)。	「ナイロンザイル事件に終止符をうつにさいしての声明」(二十頁)を発表する。とくに朝日新聞は、七段抜きで報道した。石岡 岩稜会に復帰する。	三重県山岳連盟は、「ナイロンザイル事件論争を終止するに当って」(五頁)を発表する。	アサヒグラフに「ナイロンザイル論争果てて」を二頁に発表する。	「岳人」は、「電気器具とナイロンザイル」という見出しで岩稜会の終結声明の一部を紹介する。	泉州山岳会員一名穂高で死亡。ナイロンザイル切断する。法政大学山岳部員二名剣岳で墜死。ナイロンザイル切断する。	サンデー毎日は「ナイロンザイルの紛争がウヤムヤに片づけられているうちに、またしても遭難が起った」と報道した。	
昭41・6・	43・8・	45・4・1	45・6・14	45・6・14	45・6・14	45・7・	45・8・1	45・12・	46・1・1	46・11・1	47・6・
「岩と雪」二九号によれば、某大学山岳部員一名奥多摩で墜死。一一ミリテトロンザイル切断する。	通産省資料によれば、穂高岳でザイル切断(ザイルの種類記載なし)。一名死亡する。	「山と溪谷」は、特別レポート「ザイルの特性」を発表。それに示された新しい実験データは、東京製綱蒲郡工場に設置された、丸い岩角の実験装置にもとづくものであった。	雲表クラブ会員一名奥多摩で墜死。抗張力二・七トンの一一ミリナイロンザイル切断する。	東京電力山の会会員一名巻機山で墜死。抗張力二・七トンの一一ミリナイロンザイル切断する。	通産省資料によれば、奥多摩で四メートルの滑落でザイル切断。(ザイルの種類記載なし)。一名死亡する。	ザイルメーカー東京トップKKは、角を丸くしない岩を用いたザイル実験を公開する。新聞は大きく報道した。	「岩と雪」は「ザイルが安全限界と考えられている範囲で切れてしまったらどうなる」という見出しの記事を発表する。	石岡、山岳雑誌「山と仲間」に「思い出の事件」を発表。蒲郡実験の性格とともに日本山岳会に対して「山日記」の訂正を強く訴えた。	「新岩登り技術」阿部和行氏著で「八ミリナイロンザイルを二重で使うのが最良」と発表する。	三重県山岳連盟、「昭和四十五年六月十四日に発生したナイロンザイル切断による死亡事故の原因と、今後同種の	

p33

さらにコーラに毒を入れた犯人が逮捕されたとき、その犯人は「死の責任は、コーラに毒が入っていることを見ぬけなかったコーラ飲用者の注意の足りなさにある。自業自得だ」と反論するであろうか。かりにそう反論したとき、警察は「成るほど」といって彼を釈放するであろうか。「山日記」によって、その点まで予め伏線が設けてあることは、驚くばかりである。

また両者の大きな差は、毒入りコカコーラでは犯人に何らの利益を与えていないが、ナイロンザイルの方は、企業は販売によって利益をえているのである。また毒入りコカコーラは、警察当局が懸命になって犯人を捜索しているが、ナイロンザイル事件では、犯人は明らかであるのに当局は少しも追及しようとはしない。しかしこれでは強い悪とか知能犯罪は、はびこるだけであろう。

名誉毀損罪による告訴と

印刷物「ナイロンザイル事件」の発行

さていよいよ追及のための行動を開始した。三十一年三月二十四日と四月十日の二回、篠田氏に「面会したい、内容は重大である」という趣旨の内容証明の書簡を出したが、いずれも公務多忙等の理由で拒否された。私たちは六法全書を開く日が多くなった。六月二十三日、石原は篠田氏を、時効の前日、名誉毀損罪で告訴した。大要は「篠田氏は、若山五朗の死因に関して、ナイロンザイルが切れたという石原の報告が正しいことを承知しながら、石原の報告は偽りで、死因は別にあることを推知せしめる実験を公開された。これは名誉毀損罪に該当する」というものである。二人の弁護士も熟考してくれたが、名誉毀損罪以外にみあたらなかった。蒲郡実験以後この時点では、ナイロンザイル切断による死亡事故は発生していなかった。告訴の目的は蒲郡実験の追及であるがとりあえずの目的は、告訴によって

社会に真実を知ってもらい、ナイロンザイルの弱点を明らかにして、次の犠牲を防止することであった。真実を社会に知ってもらうためにはジャーナリズムがとりあげてくれなくてはならない。従ってこの告訴をジャーナリズムが問題にするかどうか、一つの山だと考えていたが、翌日の新聞、ラジオはいっせいに大々的に報道した。とくに中日新聞は真相を察知していたので、つまりメーカーと篠田氏にだまされたことを知ったので、異例に大きく掲載した（42頁参照）。

三十一年七月一日、印刷物「ナイロンザイル事件」三〇〇頁を一五〇部作成、知人、ジャーナリズム等関係方面に配布した。著名大学教授を刑事事件で告訴するということは、容易ならぬことであり、しかも告訴人が田舎の山のグループということでは、告訴した方が狂人あつかいされてしまうであろう。私たちは告訴の理由と、それにいたった経過を、告訴と同時に社会に訴えねばならないと考え努力したが、告訴の日には間にあわなかった。「ナイロンザイル事件」という言葉をここで初めて使った。

冒頭に「宣言」として「この事件は民主主義にとって、また生命尊重にとつてきわめて重大であるので、納得できる結果をうるまでどこまでも追及する」という趣旨を大書した。またこの印刷物には、関連する多くの問題を記したが、とくに「山日記」の訂正を強く求めた。この印刷物は、日本山岳会へも送付したが何の反応もなかった。

井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなる

三十一年九月、印刷物「ナイロンザイル事件」が安川茂雄氏を経て作家井上靖氏の入手されるところとなった。また私たちはそのことで井上氏に会った。井上氏はいくつかの質問をされた後、小説のモデルにしたいと申し出られ、十一月、朝日新聞に「氷壁」として連載された（五十二年一月

p54

の轍を踏まないよう自戒していただきたい)。

不起訴の裁定

若山五朗の父は、評議員会の二十日後に悲憤の中で病死した。また三十二年二月、「氷壁」が大映から映画化された。

私たちは各種の情報から告訴が不起訴になることは決定的と考えざるをえなかった。従って告訴を有利にするための努力をしてみても、無駄骨になるにちがいないと思ったが、それでもある程度努力した。

名古屋大学法学部信夫清三郎教授の兄上が、朝日新聞の専務であるので石岡と伊藤は、信夫教授の紹介状を持って信夫専務にお目にかかった。信夫専務は、直ちに井上靖氏に電話され、事実を確かめられると週刊朝日の小松恒夫氏を呼び、ここに「ナイロンザイル事件」という見出しで二頁が掲載されることが決定した。その記事は六月二日号に掲載された。この中に篠田氏の「蒲郡実験は、穂高での遭難とは無関係である」という談話ののっているが、いうまでもなく偽りである(蒲郡実験では既述のように、前穂高のときの位置関係と称して実験が行なわれている。また阪大工学部発行の欧文による論文集に篠田氏ほか二名執筆の論文が掲載されているがその中に、蒲郡実験等は岩稜会ほか二件の、ナイロンザイル切断事故の原因を明らかにする目的で行った、と記してある。要するに篠田氏が名誉毀損罪から逃げる道は、この明らかなウソを表明する以外にない。蒲郡実験の犯罪性は、この談話だけでも明白である。

また石岡は大阪に出向いて、担当の斉藤検事に会ったり、学識経験者二七氏を回って斉藤検事あての要望書に署名してもらって発送したりした。しかし結局、三十二年七月に不起訴の決定があった。覚悟はしていたが現実のものとなってみると、衝撃はないではなかった。しかしそれよりも

朝日新聞に、検察当局の判断として、篠田氏の行為は良心的と発表されたが、これは夢想だにしていなかった。これでは善悪の判断はどうなるであろうか。企業や学者は何をやってもよい。一般庶民は殺されても文句いえない。徳川時代と変わるところはないと身をもって感じた。正木ひろし弁護士から「裁判検察官意に正義を求めることは、木によって魚を求めるがごとし」という手紙をいただいた。

後日、検察当局から石原あて、不起訴理由の通知「公文書」が送付されたが、それには「公開実験に使用した岩角は、石屋によって、九〇度の岩角には〇・五ミリのアール、四五度の岩角には二ミリのアールがそれぞれつけられてあった。その理由として、運搬のとき角が欠けるといけなから」と記してあった。

なお岩角を丸くした点について篠田氏監修の「ザイル」という本には、三十年四月二十九日の実験に使用した岩稜として「実験用岩角の構成は、いずれも稜には一ミリの面をとってある。面とりしないものを作ると、実験ごとにザイルの摩擦のために岩稜が小さく欠ける。これでは数百回の実験の正確さの意味がなくなる。これで防ぐため稜には一ミリ面をとってある」と記してある。いったい一流学者の実験で、実験データをとるために実験装置の方を細工するということがあるのだろうか。もちろん蒲郡実験は、単なる学問上の実験ではなく、事故死の原因を明らかにすることと、登山者の安全という社会的にきわめて重要な目的をもっている。篠田氏の言動によって、万一にも社会に誤った印象を与えてはならないのである。また前記「ザイル」の中では、四五度と九〇度の岩角での衝撃実験のデータが、六十四並べてあるがいずれも岩角を丸くしたもののばかりで、そうでないものは一つも記載されていない。前記したごとく蒲郡実験のとき加藤氏の注文によって、石原報告の位置関係という説明で、斜め落下の実験がなされたが、その実験データがこの中で図入りで掲載されている。

また「山日記」に掲載された実験データは六十四のうちの一つである。このような状況の中で「山日記」の「ナイロンザイルは九〇度の岩角で十三メートルまで安全」という記事は、訂正されないどころか、この書の発行によって信頼性をいっそう高めたのである（この書のもつ重大な矛盾は後記するように、四十七年六月に発表された三重県山岳連盟の見解に示してある）。

石原の告訴は不起訴となり、ナイロンザイルが岩角でも強いということでは登山界に固定した。たとえば山崎、近藤両氏著「積雪期登山」の中で、東京製綱の雨宮氏は「ナイロンザイルは非のうしろどころがない」という助言を与えておられ、ナイロンザイルが岩角で切れやすいことには、少しもふれられていない。私たちは、ザイル切断による次の犠牲が間近かにせまっていることを、感ぜずにはいられなかった。

東京製綱全面的に陳謝、ただし正しい解決とはならず

三重県山岳連盟は、問題を全日本山岳連盟で検討してもらおうとして失敗したので、次は、東京製綱に対し、要旨「三十年一月二日、前穂高で発生した若山五朗の遭難死の原因は、東京製綱が強力ナイロンザイルと称して販売したものが、ザイルとしての性能をもっていなかったからである。従ってその責任は東京製綱にある。私たちはそのように考えているが貴意を得たい。もし返事が、今後の影響上悪いと考えた場合には、業務上過失致死罪によって告発する。なお返事は、時効の関係から三十二年十二月二十五日までにいただきたい」という文書を、全日本山岳連盟副会長尾関氏に依頼して、東京製綱の三木会長に渡していただいた。

尾関氏から伊達三重県山岳連盟会長に送付された書面によれば、尾関氏は三十二年十二月二十日、三重県山岳連盟の書面を三木氏に渡し、高柳氏

とともに二時間にわたって懇談した結果、三木氏は、三重県山岳連盟の書面に少しも異存なく（注意義務に反していたことを認められた）、また「ザイルについては、一層の研究を重ねて、売り出すときには、その使用についての注意書を添付する」ことを約束された（注意書添付のことは、三十四年三月二十八日発行のアサヒグラフの中で、東京製綱取締役は木義明氏が約束している）。さらに東京製綱では近く、ナイロンザイルの欠陥を改良した新製品テリレンザイルを売り出すことになるが、その第一号を若山五朗氏の霊前に供えたいということであった。

さてナイロンザイル事件は、ザイルメーカーの誠意によって、正しい解決に向って動き出したようにみえたが、実はそうではなかった。尾関氏と三木氏との約束のうち、事故防止にとって大切なのは、ザイルメーカーがザイルを販売するとき、ザイルの弱点を明示した説明書を、ザイル一本ごとに添付するという点である。三重岳連としては、説明書をつけるという、ザイル業者の言葉を信じたのであったが、結果は、東京製綱は、前記したように引張り強さ二・四トンなど、ナイロンザイルの長所を強調するカードを添付しただけで、事故防止にはむしろマイナスとなり、約束違反もはなはだしいことを知った。しかしこの時点では、告発の時効も経過し、なすべきがなかった（ザイル業者が約束を違反してまで、ザイルの長所のみを強調する背景には「新製品が出たときには、長所だけが強調されるので注意しない」と万能と思いがちである」という前記「山日記」の記事が関連していたのではなからうか。山日記のこの記事が訂正されない限り、業者への要求は無力なものではなからうか。もっとも後で記すが日本山岳協会常務理事K氏が四十七年十二月発行の「岩と雪」二八号で、「ザイル業者は、ザイルの欠点を明らかにする必要はない」と記されているので、尾関氏や三重県山岳連盟の努力が空廻りになるのも無理からぬところである。それにしても約束しながら平気でくつがえすことにはガマンがならない）。

p196

先頭を若山に交代した。若山は、その右側を登ろうとした。そのとき若山は足を滑らせた。若山は、下からの目測で、五〇センチ程度滑落した。ザイルが頭上の岩にかかっているの、若山は直ちに停止するであったが、そのときザイルが切れ、若山は墜落行方不明となった。ザイル切断時のショックは全くなかった。問題はナイロンザイルの切断だが、従来の麻ザイルならば、このようなものい切れ方は、ありえない」というものであった。

p134

三十年一月一日早朝、石原、沢田、若山の三人パーティは、同僚に見送られ、標高二五〇〇メートルに設置した又白のテント地を出発、厳冬期末踏の岩壁、前穂高東壁へと向った。しかし同パーティは二日朝遭難、三日夜刻、他パーティの援助のもとに、石原、沢田の二名のみ、頂上から下ろされたザイルによって救出された。

リーダー石原は、若山行方不明の理由を、切れたナイロンザイルを見せ、説明した。この石原報告をめぐって、いわゆるナイロンザイル事件が発生した。石原のスケッチを交えた報告は「登攀終了まであと四〇メートルの地点にて日没となった。なおこの頃から天候悪化して降雪となった。三名はツエルトを被って狭い氷の棚で夜を明かした。翌二日午前七時半、登攀を開始、石原は割れ目を登って頭上に突き出したほぼ九〇度の岩角にザイルをかけ（九〇度という点は、石原がザイルをその岩角にかけるとき、指でなぞって九〇度ぐらいと思ったのであるが、後述のように、現場調査により九〇度であることが確認された）、往復二本のザイルを握って、突起の上に出ようと三回試みたが成功せず、ザイルにつかまったまま棚に下り、

よザイルをつけるとき袋から出した。

ナイロンザイル切断のいきさつ——問題となった石原報告

ナイロンザイル岩角欠陥の仮説

事故発生当時、鈴鹿にいた石岡らは（石岡はこの前年現役を引退し、チーフリーダーは石原国利の兄、石原一郎であった）、遭難を警察電話で知らされ、三日の夜半、上高地に到着した（冬の上高地は木村小屋一軒だけが営業している）。次の日から山仲間や若山の家族等がぞくぞくと到着した。五日、石原と沢田は手、足、耳等を凍傷し、スノーボードに乗せられ木村小屋に到着した。

私たちは両者の話を中心として、ザイル切断の原因を検討した。ナイロンザイルが五〇センチの滑落で切れるはずはなく、事故原因は、皆目見当がつかなかった。このとき小屋の主人から、暮れの二十九日、東京のパーティが同じ穂高の明神岳五峰で、九ミリのナイロンザイルを使用して登攀中、ザイルが切断し、重傷を負ったことを聞いた（後で分ったことだが、一月三日には同じ前穂高、二百メートルほど離れた所で、大阪市大の山岳部員が新品の一一ミリナイロンザイルを使用して登攀中、わずかな滑落でザイルが切断した）。

私たちは、ナイロンザイルの切断が相つぐのは、ナイロンザイルそのものに、未知の欠陥があるためではなからうかと懸命に考え、ついにナイロンザイルが岩角にかかったときには、麻ザイルよりも弱いにちがいないという確信に到着した（ナイロンザイルと麻ザイルをナタで切り較べてみた）。松本からの電話で「ナイロンザイルは切れるはずがない。石原らになんらかの過失があったのだらう」と新聞に大きく掲載されていることを知らされた。ザイル切断の真の原因がわかっていないのに、つまりナイロンザイルに未知の欠陥があるかもしれないのに、それを調査せず、ただ一方的

p108

p221

を記し、弱点をいっさい表示しなかった。一方、ザイル切断による犠牲者は後を絶たない(58頁、54頁参照)。

石岡は、三十八年七月初め、ナイロンザイル切断のため二名の死亡事故があったとき、八月三十一日の朝日新聞「観覧席」の欄で「ザイル業者は、ザイルの長所だけでなく生命に係わる欠点も示すべきだ」と訴えたが、何の変化もおきなかった。考えてみると、「山日記」が改められない以上、業者が自ら改めるなどということはあろうはずはなかった。そういう意味では相いつぐザイル切断に係わる事故死の責任は、篠田関西支部長が果たした役割といい、日本山岳会の方の比重大きいかもしれない。私たちは、私たちの努力が空振りに終るたびに、それを痛感するのであった。日本山岳会という壁の厚さをうらめしく思った。

昭和四十五年四月発行の「山と溪谷」には、ナイロンザイルの衝撃実験に関する多くのデータが「特別レポート」として発表されたが、それらは、ナイロンザイルはその後改良が加えられ、九〇度の岩角ではもはや切断しないことを示唆するものであった。石岡はそれを見てがく然となった。その記事には、それらのデータが作られた実験装置の写真が示してあるが、それは昭和三十年、東京製綱蒲郡工場に設置された例の蒲郡実験のさいに使われたものである。しかし岩角を丸くした実験データであることは、全く記されていない。ザイルメーカーには蒲郡実験の反省がないどころか、憶面もなく、角を丸くした岩角を使った、殺人につながる実験データを出しつづけている。一般登山者にとつては、いかに危険があるのか。石岡はただ天を仰いで嘆息するのみであった。しかしながらこの場合も「山日記」というお手本がある以上またそれが訂正されない以上、「山日記」の二番煎じ「特別レポート」を責めることは、できないことであった。「山と溪谷」に「特別レポート」が発表された二ヶ月後の六月十四日、奇

しくも同じ日に別々の場所で、引張り強さ二・七トンの同種のナイロンザイル二本が、いずれもわずかな滑落で切断し、二名が死亡した。岩角にはナイロンの糸屑が付着していた。これをジャーナリズムが大きく報道し、ナイロンザイル事件は再燃した。

八月一日、東京製綱とは別のザイルメーカー(東京トップ)による実験が公開されたが、そのときは岩角を丸くしなかったもので、十五年間にわたって改良されたナイロンザイルも、九〇度の鉄製エッジでは、六〇キログラムの錘り、一・五メートルの落下で切断した。六〇度では、一人一人ぶら下っただけで切断した。ここにおいて蒲郡実験は生命を売る手品であり、また日本山岳会が「山日記」によって、それを権威づけたものであったことが、白日のもとにさらされた。もしも蒲郡実験で、角を丸くしない実験が行なわれていたならば、また「山日記」に角を丸くしない実験データが記されていたならば、今回の公開実験は必要ではなかったのである。十五年の間隔を置いて、ザイルメーカー自身によって行なわれた二つの公開実験の間の犠牲は、すべて大死であった。蒲郡実験と「山日記」は、人間の民主的な進歩を十五年間停止させたのである。

安全限界内での死亡事故

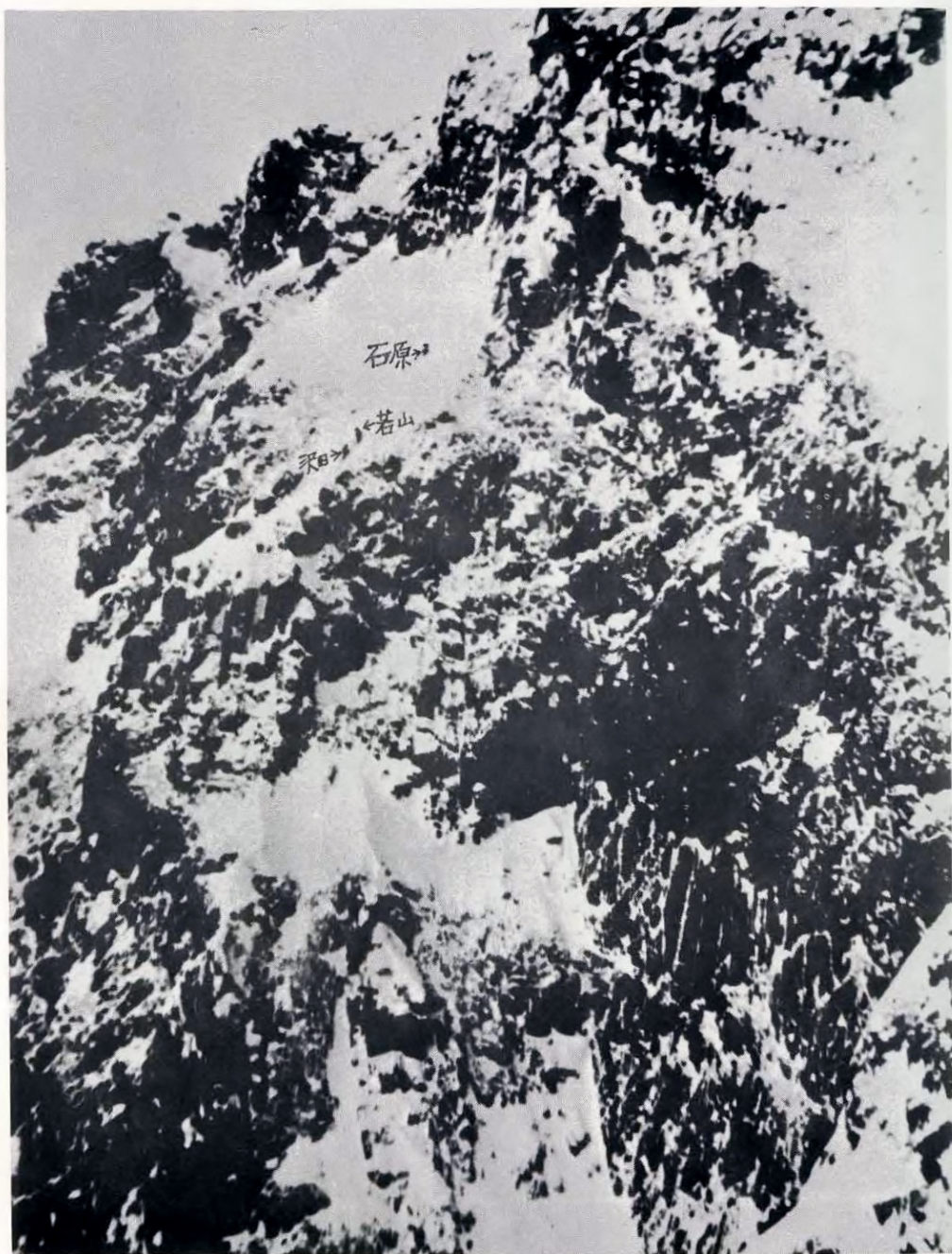
「特別レポート」に掲載した「山と溪谷」社は、ことの重大さに気付き四十五年十二月発行の「岩と雪」で、「ザイル切断死亡事故に関する座談会」の記事を掲載したが、その見出しには「絶対に切れないザイルはないはずである。しかしそれがクライマーの安全限界と考えている範囲内で切れてしまったらどうなる」と記した。

安全限界内での事故の原因は、いうまでもなく「山日記」と「特別レポート」、とくに権威ある「山日記」の記事(十三メートルまで安全)にあ

昭和五十二年七月

ナイロンザイル事件報告書

岩
稜
会



石原・若山・沢田のパーティ、前穂高東壁第2テラスを登る。(大阪市大山岳部、故大島健司氏 30.1.1.
午後3時頃撮影)

若山五朗君の霊よ

君の尊くも若い生命と、私たちの汗でできた本書を、
謹んで君の霊前に捧げる。

まえがき

登山に係わる遭難事故の防止は、関係者の願いであります。また人権侵害が発生しない社会は、すべての人々の願いであります。社会の出来事のなかには、そのまま放置しておいたのでは、それが前例となってそれらに重大な悪影響をもたらすものがあります。こういうものに対しては、その事件を追及し、悪影響を防止するのに役立つような解決つまり正しい解決にまで持つてゆくことが必要であると考えます。

ナイロンザイル事件は、そういう性格の事件であると考え、私たちは、正しい解決を求めて過去二十一年間、努力してきたのであります。

また私たちは、この事件を発生させた人々によって、きわめて大きな不当な迷惑をうけました。このような人権侵害の再発を防止するためには、被害者は泣き寝入りしないことが大切であると考え、私たちはそのためにも、正しい解決を求めて努力をつづけたのであります。

その間、新聞・ラジオ・テレビ・雑誌・学者グループの要望書、山岳団体の声明等でしばしばとりあげられ、また井上靖氏の小説「氷壁」のモデルともなり、多くの人々に知られ、多方面から正しい解決のためあくまで努力を続けるようにとの、ご激励をいただけてきました。

私たちは微力ながらも努力をつづけてきましたが、昭和五十年六月には、ザイルの安全基準が制定されました。また五十一年十月には、日本山岳会との問題も、その線に沿って円満解決しました。そこで私たちは、これらをもって最低線ながらも正しい解決に到達したと考え、この事件に終止符を打ち、同時に、事件の経過報告を発表することになったのであります。こういう解決では不十分であるとお考えの方も多いかとは存じますが、どうか事情ご賢察いただきまして、ご寛容下さいますようお願い申し上げます。

かえりますれば過去二十年有余、井上靖氏、三重県山岳連盟をはじめとして私たちを陰に陽にご支援下された方々は、数

えることが出来ないほどであります。私たちのささやかな努力が、曲がりなりにも結実しましたことは、ひとえにそうした方々のたまものであります。私たちはこの事件に終止符を打つにさいして、その方々のご厚情に対し、衷心から厚くお礼申し上げる次第であります。

二十年を越えるこの事件の経過は、複雑であり、多くの枝葉をもっていますが、ここでは事件の骨子のみ簡単に、簡条書程度に報告させていただきます。

なおこの事件に関連して、多くの生命が失なわれておりまたこの事件の性格は、将来の人々の安全に大きく係わることでありますので、以下歯に衣を着せずに申し上げます。ご了承いただきますようお願いいたします。

また公益とくに生命尊重を目的とするご反論は、大歓迎であります。論争を重ねれば重ねるほど、社会にプラスになると考えます。もちろんその間に、私たちの事実誤認とか、その目的に照らしてマイナスとなるような考え方がありましたときには、直ちに訂正してお詫び申し上げます。

昭和五十二年七月

岩 稜 会

目次

自己紹介	1
ナイロンザイル購入のいきさつ	1
ナイロンザイル切断のいきさつ——問題となった石原報告	2
ナイロンザイル岩角欠陥の仮説	2
岩角欠陥に対する反響	3
ナイロンザイルは切れたのではなくて結び目がほぐれたのではないか	3
岩角欠陥を証明するための小規模な実験	4
ナイロンザイル切断原因の検討会	5
篠田阪大教授による事故原因究明のための実験開始	5
蒲郡実験前に行なった篠田氏との会見	5
蒲郡実験——ナイロンザイル事件発生する	6
事件追求を決意する	7
蒲郡実験の内幕	8
蒲郡実験の影響	9
蒲郡実験を追及するための準備	10
遺体発見と加藤理事の話	10
現場調査とそれにもとづく実験	10
篠田氏との二回目の会見——重なる裏切り行為	11
訴訟の決意と準備	11
「山日記」問題発生する	12

名誉毀損罪による告訴と印刷物「ナイロンザイル事件」の発行	14
井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなる	14
奈良・吉野会議	15
不起訴の裁定	16
東京製綱全面的に陳謝、ただし正しい解決とはならず	17
不起訴以後の追及——公開質問状	18
ナイロンザイル切断事故発生——中日新聞との交渉	18
篠田氏の虚偽の声明発表——ナイロンザイル事件の前段終了する	19
ザイル業者の注意義務欠除——「山日記」の影響拡がる	19
安全限界内での死亡事故	20
ナイロンザイル事件の追及再開——石岡、ザイル実験装置を製作する	21
三重岳連の見解発表——その反論——またその反論	21
事態は好転——鈴鹿での公開実験	22
生命に直結する矛盾	23
ザイルの安全基準制定される	23
「山日記」の訂正を旨指して	24
日本山岳会の姿勢転換	26
ナイロンザイル事件を終って	28

写真	29
年表	47

ナイロンザイル事件報告書

自己紹介

まず私たち岩稜会の自己紹介をさせていただきます。

私たちの山のグループ岩稜会は、昭和二十一年、戦後の厳しい社会情勢の中で、三重県鈴鹿市に誕生した。穂高連峯に数多く登山し、屏風岩中央カンテをはじめ幾多の初登攀に成功した。また「屏風岩登攀記」「穂高の岩場」上下を発行した。会員の数は、約四十名である。

ナイロンザイル事件に、とくに関係した者としては、石岡繁雄、伊藤経男。ナイロンザイル事件の発端となった昭和三十年一月二日、前穂高東壁に登攀したパーテイの、リーダー石原国利、同じくメンバー沢田栄介、同じく死亡した若山五朗（当時三重大学一年、石岡の実弟）である。

ナイロンザイル購入のいきさつ

問題のザイルについて述べる。当時ザイルといえばマニラ麻十二ミリであった。抗張力約一二〇〇キログラム、そのときの伸び約十五パーセントである。事件発生の三、四年前つまり昭和二十六年頃からナイロン製ザイルが現われた。麻ザイルの時代でも、ザイル切断事故はときどきあったが、ザイルが古かったのではないかと、落石がザイルを切ったのではないかなど、現場再現が不能なままに、真の原因は明らかでなかった。いずれにしても新品のザイルは、登山者の滑落によって切断することはないと考えられていた。

しかし戦後、アメリカの論文がきっかけとなって、日本でも研究が進み、その結果、麻ザイルは伸びが少ないので、墜落のときの衝撃エネルギーを吸収できず、そのためザイルが切断することが判明した。これに反し、新

しく登場したナイロンザイルは、抗張力も伸びも大きく、それに取扱いが容易で、ザイルとして理想的であるといわれた。

ちょうどその頃、私たちが使っていた麻ザイルが古くなって買いかえる必要があったので、当時日本唯一のザイルメーカーである東京製綱K.K.のナイロンザイル二本を、運動具店を経営する熊沢友三郎氏から購入した（ナイロンの原糸は東洋レーヨンK.K.で製造した）。熊沢氏によればそのザイルは、経八ミリの新製品で、抗張力一〇三〇キログラム、そのときの伸び約五十パーセント、保証付強力ナイロンザイルで、それと同じザイルを関西登高会にも販売したということであった。

同ザイルは従来の麻ザイル十二ミリに比して、抗張力の点ではやや劣るが、伸びが大きいので衝撃吸収能力全体としては三倍強となる。いずれにしても当時、東京製綱という一流メーカーから発売された新品のザイルに対する信頼は絶対的なものであり、切断などということは夢想だも出来ないことであった（後述することであるが、ナイロンザイル事件も終りに近づいた昭和四十八年になって、東京製綱は同社が販売するザイルに、パンフレットを添付するようになったが、それには八ミリナイロンザイルは、非常に弱いので、登高用、下降用を問わず、またダブル（二重）ザイルでも岩壁登攀には一切使用してはいけない。八ミリは補助用であると記載した。また国が五十年六月に制定したザイルの安全基準でも、八ミリはザイルから外された。従って結果論であるが、ザイルメーカーは、ザイルでないものを、保証付強力ナイロンザイルと称して販売し、死亡事故が起きたことになる。試験装置を持たない一般登山者には、ザイルの強度テストは不可能であり、従って事故防止の責任はザイルメーカーにある）。

ただ熊沢氏の説明では、ナイロンは紫外線に触れると、弱くなり方が早いということであったので、私たちはナイロンザイルを保護するため、キャンパス製の袋を特別注文で作り、それに入れて山に持ってゆき、いよい

よザイルをつけるとき袋から出した。

ナイロンザイル切断のいきさつ——問題となった石原報告

三十年一月一日早朝、石原、沢田、若山の三人パーティは、同僚に見送られ、標高二五〇〇メートルに設置した又白のテント地を出発、厳冬期末踏の岩壁、前穂高東壁へと向った。しかし同パーティは二日朝遭難、三日夜刻、他パーティの援助のもとに、石原、沢田の二名のみ、頂上から下ろされたザイルによって救出された。

リーダー石原は、若山行方不明の理由を、切れたナイロンザイルを見せて説明した。この石原報告をめぐって、いわゆるナイロンザイル事件が発生した。石原のスケッチを交えた報告は「登攀終了まであと四〇メートルの地点にて日没となった。なおこの頃から天候悪化して降雪となった。三名はツエルトを被って狭い氷の棚で夜を明かした。翌二日午前七時半、登攀を開始、石原は割れ目を登って頭上に突き出したほぼ九〇度の岩角にザイルをかけ（九〇度という点は、石原がザイルをその岩角にかけるとき、指でなぞって九〇度ぐらいと思ったのであるが、後述のように、現場調査により九〇度であることが確認された）、往復二本のザイルを握って、突起の上に出ようと三回試みたが成功せず、ザイルにつかまっていたまま棚に下り、先頭を若山に交代した。若山は、その右側を登ろうとした。そのとき若山は足を滑らせた。若山は、下からの目測で、五〇センチ程度滑落した。ザイルが頭上の岩にかかっているの、若山は直ちに停止するであったが、そのときザイルが切れ、若山は墜落行方不明となった。ザイル切断時のショックは全くなかった。問題はナイロンザイルの切断だが、従来の麻ザイルならば、このようなもうい切れ方は、ありえない」というものであった。

ナイロンザイル岩角欠陥の仮説

事故発生当時、鈴鹿にいた石岡らは（石岡はこの前年現役を引退し、チーフリーダーは石原国利の兄、石原一郎であった）、遭難を警察電話で知らされ、三日の夜半、上高地に到着した（冬の上高地は木村小屋一軒だけが営業している）。次の日から山仲間や若山の家族等がぞくぞくと到着した。五日、石原と沢田は手、足、耳等を凍傷し、スノーボードに乗せられ木村小屋に到着した。

私たちは両者の話を中心として、ザイル切断の原因を検討した。ナイロンザイルが五〇センチの滑落で切れるはずはなく、事故原因は、皆目見当がつかなかった。このとき小屋の主人から、暮れの二十九日、東京のパーティが同じ穂高の明神岳五峯で、九ミリのナイロンザイルを使用して登攀中、ザイルが切断し、重傷を負ったことを聞いた（後で分ったことだが、一月三日には同じ前穂高、二百メートルほど離れた所で、大阪市大の山岳部員が新品の一一ミリナイロンザイルを使用して登攀中、わずかな滑落でザイルが切断した）。

私たちは、ナイロンザイルの切断が相つぐのは、ナイロンザイルそのものに、未知の欠陥があるためではなからうかと懸命に考え、ついにナイロンザイルが岩角にかかったときには、麻ザイルよりも弱いにちがいないという確信に到着した（ナイロンザイルと麻ザイルをナタで切り較べてみた）。松本からの電話で「ナイロンザイルは切れるはずがない。石原らになんらかの過失があったのだらう」と新聞に大きく掲載されていることを知らされた。ザイル切断の真の原因がわかっていないのに、つまりナイロンザイルに未知の欠陥があるかもしれないのに、それを調査せず、ただ一方的

に登山者のミスと断定したのでは、次の遭難を発生させることになるかも知れないと思い、私たちは遭難状況（図入り）と、ナイロンザイルの岩角欠陥という私たちの仮説について、報告書を作った。仲間で手分けして七部コピーした。若山の遺体を発見できず、憔悴の姿で松本に下りたとき、そのコピーを各新聞社に渡した。それは中日新聞に一月十一日と十二日に掲載された（40頁参照）。また一月十五日の朝日新聞は「今日の問題」の欄で「事故防止のために原因を究明しなくてはならない」と報じた。一月十七日のNHKは「私たちの言葉」で死亡した若山の父の「息子は新製品の試験台となって、あたら若い生命を落した」という言葉を全国に報じた。

岩角欠陥に対する反響

私たちが発表した、「ナイロンザイルの岩角欠陥」という仮説に対する反響は、当時むしろ否定的であった。学習院大学教授木下是雄氏が、一月二十四日付で石岡に送られた書簡が、その点をよく示している。その要旨は「今日、物理学研究連絡委員会で篠田さん（篠田軍治、大阪大学教授、応用物理専攻、工学博士、日本山岳会関西支部長、登山用具の権威——カッコ内筆者記す）にお目にかかり、大阪市大山岳部でのナイロンザイル切断の話など伺った。以下述べる意見はかなり篠田さんの影響が入っていると考えられた。小生は貴兄が強調されるように、一般にナイロンロープが notch effect（シャープなエッジ、筆者記す）に対して弱いとは思わない。それはナイロン繊維は屈曲試験や摩耗試験に対して異常なほどの耐久力を示しているからである。それよりも東洋レーヨンが東京製綱に送った *notice* の出来が悪かったか或いは東京製綱のより方が悪かったという方が *probable* のように思う。篠田さんは低温脆性ということにかなりの重みをおいてお

られた。しかしナイロンは摩擦係数が小さいために刃物が入りやすい、つまり切れやすい、従って鋭い岩角で切れやすいという推論も不可能ではないであろう。これは貴兄のお考えと一致するかもしれない。もしこれが事実とすると、それはナイロン繊維の問題で、ナイロンザイルの将来に対して致命的である。もちろんこの仮定も実験的検証を試みるに値する」というものである。大阪の田中榮蔵氏から石岡にあてられた書簡にも、それと同様の趣旨が記されている。

ナイロンザイルは切れたのではなくて

結び目がほどこたのではないか

一月十二日、前記熊沢氏から、凍傷のため鈴鹿市中勢病院に入院中の石原、沢田に対して、いくつかの質問を記した書簡がとどけられた。また一月十六日、熊沢氏は入院中の両君を見舞われた。それらの中で熊沢氏からザイルは切れたのではなくて結び目がほどこたのではないか、ナイロンザイルは結び目がほどこやすい、という質問がなされている。

また三月上旬に行なわれた、若山五朗の父と東京製綱、東洋レーヨンの代表との会合でも、事故はザイルに原因があるとする若山の父の主張と、取扱いが悪かったからだとするメーカー側の主張が対立し、会談は決裂している。

なお熊沢氏から提示された、ザイルの結び目に対する疑惑は、一般論としてはありうるが、それが石原、沢田に向って直接なされたことは、石原らにとって重大な意味をもつ。ザイルの結び方を誤ったがために、ザイルの結び目がほどこけて墜落したという場合には、石原の手に残ったザイルの先端は、端がほぐれないようにきちんと処理された状態となっている。これに反しザイルが切れたときのザイルの端は、燃りがもどってバラバラである。石原は救出されたとき、「ザイルが切れました」と言ってバラバ

ナイロンザイル切断原因の検討会

二月九日、朝日新聞大阪本社において、日本山岳会関西支部主催のナイロンザイル切断事故検討会が開催された。議長は前記篠田支部長であった。篠田氏は、事故原因の究明は、死因を明らかにするためと、今後の登山者の生命を守るために急がねばならないと言われ、またその研究には自分があったと発表された。

この席上、石岡は、前記名大土木研究室で行った実験結果を発表し、篠田氏をはじめ出席者の多くはメモしていられたが、遭難者の肉親の研究では客観性なく、なんの反応もなかった。

また関西登高会の梶本徳次郎氏から「当時自分たちも、岩稜会と同じ八ミリナイロンザイルを購入して、岩稜会と同じく又白に入っていた。もしも岩稜会に遭難がなければ、われわれの方が遭難していたかもしれない。われわれは幸運であったと思っている」という発言があった（ザイル検討会のことは、翌々日のスポーツ新聞に掲載された）。

篠田阪大教授による事故原因究明のための実験開始

山岳雑誌「山と溪谷」と「岳人」の三月号には、石岡が上高地で記した報告書の全文が掲載された。それについて「岳人」は「世にも不思議な出来事」という見出しをつけ、「山と溪谷」は報告の記事の後へ「ナイロンザイルの切断事故は、山岳界に大きなショックを与えた。次号に、阪大の篠田教授の実験報告を発表する」と記した前記熊沢氏は「現在の山岳界で、この問題に答える人はいない。この重大のときに発表出来ないのが現状で、素人考えはやめて、科学的調査による必要がある」と記し、この問

題はいよいよ注目を集め、登山界はもとより一般社会も、篠田氏の実験結果の発表を待った。篠田氏は正に、本件を鑑定するにふさわしい人であった。

蒲郡実験前に行なった篠田氏との会見

四月二十日頃、三重県山岳連盟に対し、四月二十九日、愛知県蒲郡の東京製綱において、篠田氏指導によるザイルの実験が公開されるから、見にくるようという連絡があり、加藤富雄理事が出席することになった。

私たちとしては、四月から五月にかけての連休を利用して、若山の遺体捜索を行なうことになっていたので、公開実験を見に行くことが出来なかった。若山の実家では葬式も出来ず、それに死因に関する疑惑があるので、村人への思惑から沈痛をきわめていたのである。そうかといって篠田氏の、二月以降の研究結果がどうであったかと心配だったので、四月二十四日、石岡と伊藤は、篠田教授をおとずれた。

篠田氏は、東洋レーヨンで行った実験の結果、ナイロンザイルは岩角で弱く、石原報告の条件で切断することが判ったと説明され、また四月二十九日の公開実験も、そういう結果になると言われた。引っぱり強いナイロンザイルがなぜエッジに弱いのか、という結晶学的な説明（仮説）もなされた。とくに八ミリナイロンザイルは、横からの圧力に対し麻ザイルの一桁弱く、ザイルとして不適当であることが判ったと語られた（当日、篠田氏との会合をあっせんして下さった篠田氏の教え子、運動具店美津濃K.K.の新保正樹氏からお聞きしたものも含む）。

ナイロンザイル切断原因の検討会

二月九日、朝日新聞大阪本社において、日本山岳会関西支部主催のナイロンザイル切断事故検討会が開催された。議長は前記篠田支部長であった。篠田氏は、事故原因の究明は、死因を明らかにするためと、今後の登山者の生命を守るために急がねばならないと言われ、またその研究には自分にあつたと発表された。

この席上、石岡は、前記名大土木研究室で行った実験結果を発表し、篠田氏をはじめ出席者の多くはメモしていられたが、遭難者の肉親の研究では客観性なく、なんの反応もなかった。

また関西登高会の梶本徳次郎氏から「当時自分たちも、岩稜会と同じ八ミリナイロンザイルを購入して、岩稜会と同じく又白に入っていた。もしも岩稜会に遭難がなければ、われわれの方が遭難していたかもしれない。われわれは幸運であつたと思つてゐる」という発言があつた（ザイル検討会のことは、翌々日のスポーツ新聞に掲載された）。

篠田阪大教授による事故原因究明のための実験開始

山岳雑誌「山と溪谷」と「岳人」の三月号には、石岡が上高地で記した報告書の全文が掲載された。それについて「岳人」は「世にも不思議な出来事」という見出しをつけ、「山と溪谷」は報告の記事の後へ「ナイロンザイルの切断事故は、山岳界に大きなショックを与えた。次号に、阪大の篠田教授の実験報告を発表する」と記した前記熊沢氏は「現在の山岳界で、この問題に答える人はいない。この重大のときに発表出来ないのが現状で、素人考えはやめて、科学的調査による必要がある」と記し、この間

題はいよいよ注目を集め、登山界はもとより一般社会も、篠田氏の実験結果の発表を待った。篠田氏は正に、本件を鑑定するにふさわしい人であつた。

蒲郡実験前に行なつた篠田氏との会見

四月二十日頃、三重県山岳連盟に対し、四月二十九日、愛知県蒲郡の東京製綱において、篠田氏指導によるザイルの実験が公開されるから、見にくるようという連絡があり、加藤富雄理事が出席することになった。

私たちとしては、四月から五月にかけての連休を利用して、若山の遺体搜索を行なうことになつていたので、公開実験を見に行くことが出来なかつた。若山の実家では葬式も出来ず、それに死因に関する疑惑があるので、村人への思惑から沈痛をきわめていたのである。そうかといつて篠田氏の、二月以降の研究結果がどうであつたかと心配だったので、四月二十四日、石岡と伊藤は、篠田教授をおとずれた。

篠田氏は、東洋レーヨンで行つた実験の結果、ナイロンザイルは岩角で弱く、石原報告の条件で切断することが判つたと説明され、また四月二十九日の公開実験も、そういう結果になると言われた。引っぱり強いナイロンザイルがなぜエッジに弱いのか、という結晶学的な説明（仮説）もなされた。とくに八ミリナイロンザイルは、横からの圧力に対し麻ザイルの一桁弱く、ザイルとして不適当であることが判つたと語られた（当日、篠田氏との会合をあっせんして下さつた篠田氏の教え子、運動具店美津濃K.K.の新保正樹氏からお聞きしたものも含む）。

蒲郡実験——ナイロンザイル事件発生する

石岡は父に、篠田氏との会合の模様を話し、四月二十九日に行なわれる篠田氏の実験で、ナイロンザイルが岩角で弱いことが明らかにすると伝えた。

私たちは四月二十八日、遺体捜索のために穂高に向った。伊藤は公開実験の結果を待って、穂高に向かうことになった。

五月三日、石岡は、遺体捜索のためのテント地、又白の氷雪の上で、伊藤から五月一日付けの中日新聞をうけとった。それには六段ぬきで「若山君の遺族や友人が穂高へ遺体捜索に向ったという四月二十九日、東京製綱蒲郡工場で阪大篠田教授指導によるザイルの実験が公開された。ザイルは、前穂高で切断した八ミリナイロンザイルと同種のもの等が使われた。岩角は九〇度と四五度の二種、落下距離はウインチで調節された。実験の結果、八ミリナイロンザイルは、九〇度よりもより四五度の岩角で、三メートルの落下衝撃で切れず、麻ザイル十二ミリの三倍の強さを示した。前穂高での事故の原因は、ナイロンザイルの岩角欠陥によるものではないかと、一部で言われていたが、実験の結果、ナイロンザイルは岩角でも麻ザイルより強く、従って事故の原因はザイル以外にあるようだ」と記してあった（41頁参照、なおこの実験は、蒲郡実験とか篠田実験とかと呼ばれている。以下蒲郡実験と称する。ナイロンザイル事件の核心は、蒲郡実験と後述の「山日記」——日本山岳会発行、昭和三十一年度版——問題である）。

石岡は、信ずべからざるものを見て仰天し、周りの雪が紫色に転ずるのを感じた。石岡は「実験はインチキだ、手品だ」と叫んでいた。石岡にはその手品のからくりがすぐ分った。実験用岩角が面とりして丸くしてあっ

たにちがいがなかった。石岡はエッジの実験をくり返し行なっていたからである。エッジの部分を一ミリほど面とりすれば、ナイロンザイルは急に強くなる。しかしこの実験をやっていない人には、たとえエッジの丸みに気がついたとしても、この程度の丸みが、ナイロンザイルを極端に強くすることになるとは、想像できなかったであろう。

ロープをナイフで切る実験で、刃を丸くしたナイフを使って、ロープは切れない実験を見せても「そんなナイフでは駄目だ」と誰しもその点を指摘するであろう。しかし蒲郡実験では、膨大な装置と篠田教授の実験という肩書きに圧倒され、ザイルが切れない実験に疑いをもったり、切れない原因に気付き、それを指摘するという状態への移行はありえなかったであろう。それが手品の手品たるところである。

篠田氏は、公開実験前の実験でナイロンザイルは岩角で弱く、石原報告の条件で容易に切れることを確信されたのである。篠田氏はそのことを一般社会に誤りなく発表することが（たとえば篠田氏の実験を予告していた山岳雑誌「山と溪谷」を通じて）、篠田氏が研究に着手されるとき発表された、「死因の究明と登山者の安全」という、篠田氏の研究目的の達成にとって必要なことである。それは篠田氏の社会的義務である。もし万一にも篠田氏の言動が原因となって、前記と異なった印象を一般社会に与えるようなことになったとすれば、またそのために人権の侵害が発生したとすれば篠田氏には偽証罪が該当したためそのために登山者が死ぬようなことになれば、篠田氏は殺人罪にも問われかねないのである。

しかるに篠田氏が実験責任者となっている蒲郡実験では、篠田氏の意に反して、ナイロンザイルは岩角で非常に強い結果を示している。ことさらに石原報告の位置関係での実験が行なわれ、前穂高で切れた八ミリナイロンは切れない結果を示している。篠田氏はなぜそのような研究目的と反する結果を示す実験を中止させられなかったか。あるいは「この実験装置の

岩角は面がとって丸くしてあるので、ナイロンザイルは強い結果を示しているが、もし通常の岩場でみられるような、岩角がギザギザしていたり、シャープなときには、稜角九〇度程度の岩角でもナイロンザイルは容易に切れる。また石原報告の位置関係で容易に切断する」と言はれなかったか。いずれにしてもザイルメーカーと篠田氏は死因に関する石原報告が正しいことを承知せられながら、それが正しくないという印象を観衆に与えられたのである。ナイロンザイルが岩角で切れやすいことを承知せられながら、ナイロンザイルは岩角でも強いという実験を、観衆に見せられたのである。登山者や新聞記者をわざわざ集めてしまったのである。新聞記者を通じて社会全体をだましたのである。

商品の直接生命に係わる欠点を術策を弄して、欠点はないとだましたのである。冷酷な無差別殺人を計画したことと何らかわるころはない。このような恐るべき国民全体に対する犯罪が、かつてあったであろうか。水俣事件等で企業が、生命に係わる実験（猫の実験）を隠していたという話は聞いたが、策略をもって、現に販売されている品物の、生命にかかわる弱点を逆に強いと、登山関係者と新聞記者をわざわざ集めてまで、積極的に社会を欺いたという例を聞かない。生命を売る手品を行なったということとを聞かない。登山者の安全をつねに考えてはならない、日本山岳会の支部長でかつ国家公務員の大学教授が、その主役を演じたのである。

事件追及を決意する

事件の動機は、あまりにも明白である。ザイルメーカーは、ナイロンザイルに弱点がないこと、従ってザイルメーカーには、事故死の責任がないことを、社会に印象づけるため、社会的に信頼度の高い著名学者を買収したのである。ザイルメーカーだけが実験したのは、観衆に信頼されない

であろう。それどころか観衆は警戒心をもち、手品のタネが発覚するかもしれない。そうなるとは大変なので、著名学者を実験責任者に仕立てることを計画したのである。一方、学者は、メーカーの意図を承知のうえで、実験責任者となったのである。その説明以外に、この不可解な出来ごとの説明はないはずである。ザイルメーカーと篠田氏による共同謀議が、どのように行なわれたか。両者の間にどのような取り引きがなされたか。その状況を想像するとき、怒りにふるえるのである。

もしも東京製綱とくに篠田氏の行為が、このまま追求されることなく放置されたならば、我が国の将来に重大な悪影響を残すことは明らかである。この行為のため、同行者およびその家族に対する人権侵害と、一般登山者に対する生命の危険が発生したが、その反面、東京製綱は、事故死に関連し当局（過失致死罪）と遺族（損害賠償請求の訴え）の追求を逃れることが出来たばかりか、もともと良心的な品を販売していたという点で、旧に倍する信用を獲得したのである。これらははかり知れぬ不当な利益である。もしもこの行為がそのまま容認されるならば、今後企業の過失にもとづく人命の喪失が発生した場合、企業は今回の事件をよい前例として、著名学者を買収して、事実を曲げ、無実の者に罪をなすりつけ、さらに大衆の生命を故意に危険にさらすという、人権の侵害が後を絶たない。力のない一般大衆は、大企業と著名学者との協力という絶対の力の前に、易々と生命を奪われることになる。一般庶民にとってこれほど恐ろしいことはない。

これを防ぐには、この事件の追及しかない。被害者は泣き寝入りしてはいけないうのだ。生涯をかけても戦かわなくてはならないのだ。罪の転化だけなら、ガマンも出来よう。しかしそれが国民の生命の犠牲を承知の上でなされたことが、どうしてもガマン出来ないのだ。国民を指導する立場にある著名学者によって行なわれたことが、ガマン出来ないのだ。弟の犠牲

を大死にさせられた石岡は、又白のテントの中でこの決意をもったのであった。

蒲郡実験の内幕

次に記すものは、後日判明したものであるが、蒲郡実験の性格を理解するのに参考になると思うので、ここで記すことにする。

(1) 昭和五十年七月七日、石岡は愛知県岡崎市在住の、Y氏という見知らぬ方から手紙を受けとった。それによれば、Y氏は、当時愛知県の職員で（現在退職、老令の方）、職務の関係から東京製綱蒲郡工場をひんばんに訪れ、同工場の職員とも親しく、従って蒲郡実験の内情を知りうる立場にあった。Y氏の手紙を要約すれば「前穂高でザイル切断事故が発生したので、ザイルメーカーの東京製綱では早速実験を始めた。その結果、ナイロンザイルは岩角に弱く、ヤスリ実験ではマニラ麻の十三分の一の強さしかなく、前穂高の条件で切断することが分った。そこで試験委員がその実験結果を発表したいと言ったところ、それを発表すれば在庫のザイルが売れなくなる」という上司からの命令で、発表しないことになった。この会社では、このような人道上許されるべきでないことが、平然と行なわれていた」というものである。

石岡は、七月十三日Y氏に会い、さらにその後も電話や手紙によって、蒲郡実験の内容がかなり明らかになった。たとえば蒲郡実験では、最初に岩角を丸くしないで実験したところ、ナイロンザイルは弱かったので、角を丸くすると非常に強くなった。そこで角を丸くした実験を公開することになった。要するに実際の岩場の岩角は、稜線がギザギザであったりシャープなものが多く、それがザイルを切れやすくする原因となっている。しかし蒲郡実験では面とりによってそれを削り落とし、ザイルを切れにくく

した実験が、ことさらに公開されたのである（後述するが、五十一年四月二十九日、篠田氏から、日本山岳会「山日記」担当理事皆川氏に送付された書簡にも、これと同じ意味のことが記してある）。

(2) 石岡は、昭和五十年十月二十五日、蒲郡実験を参観された、三重県山岳連盟理事加藤富雄氏から、次のことを聞いた。石岡が加藤氏に「蒲郡実験のとき、石原報告の位置関係という落下衝撃実験が特別に行なわれているが、その実験を依頼したのは加藤さんでしたか」と尋ねたところ、加藤氏は「そうです。岩稜会の遭難を聞いて上高地にかけつけたとき、木村小屋で石原さんから、遭難のときの位置関係を聞き、それを手帳にメモしていたので、蒲郡実験のとき、前穂高での位置関係で実験してほしいと希望し、その実験が、前穂高で使われたものと同種のハミリナイロンザイルを使って行なわれた。ハミリナイロンザイルは切れなかった（この実験は、錘りをエッジの斜め上方から落すもので、ザイルはエッジにそって横にも動く。なおエッジに面とりが施こしてなければ、ナイロンザイルはひとたまりもなく切れる。カッコ内筆者記す）。なおこれまで石岡さんに話さなかったが、実験終了後、参観者一同、東京製綱の招待で料亭に案内され、芸妓をはべらせた酒宴が催おされた。その席で東京製綱の責任者から「巷間、ナイロンザイルが岩角で切れて遭難したという風評があるが、皆さん、今日の実験で、ナイロンザイルは切れなかったことがおわかりでしょう」という説明があった。なお篠田さんが後日「蒲郡実験は、グライダーや船舶の曳航绳に関する実験であって、登山とは無関係」と発表していられるが、とんでもないことだ」と語られた。

私たちには、二十年の歳月が、かくされた真実を暴いてゆく様子が、目に見えるようであった。

蒲郡実験の影響

五月七日、私たちは遺体を発見できません、若山の実家に帰宅したが、誰一人、中日新聞の記事つまり蒲郡実験を疑がう者はいない。とくに若山の父は、私たちを見るなり「ナイロンザイルは切れないではないか。お前たちはウソを言っている。石原は何をしたか分りはしない」と激しく怒り門には「山岳関係者立入厳禁」という札をぶら下げ、また石岡は、父から勘当された。石岡の木製の実験装置は、だれもふりむかなくなつた。ナイロンザイルは簡単に切れているのに、疑いの目でしか見ないのだ。この状態は遺体発見までつづいた。

七月一日発行の雑誌「化学」には、早稲田大学山岳部監督関根助教授が「ナイロンザイルに欠陥はない。石原らは誰も見ていないことを幸いとして、自分たちのミスでザイルに転嫁したのであらう」と発表した（信用毀損罪該当者）。また篠田氏の実験を予告していた「山と溪谷」は、七月号に「ザイルメーカーは、科学的テストによってナイロンザイルを保証した」と発表した。また同じく「山と溪谷」で前記熊沢氏は「四月二十九日、東京製綱蒲郡工場で、工場側が百万円を投じて実験設備を作り、阪大篠田先生指導のもとでザイルの実験が行なわれた。その結果、事故の原因は、指導者之余りにもザイルの知識を知らな過ぎたことが分つた」と発表した。また東京製綱は七月二十八日、約五〇名の学識者の前でザイルの実験を行ったが、これも四月二十九日同様、ナイロンザイルの欠点を示さない実験であつた。九月一日発行日本繊維学会誌第八巻、第九号は、多数の学者が見学している写真とともに「苛酷な条件でもナイロンザイルだけは異常な強さを示した」と記した（石岡は、そのときの見学者の一人である名工大のT教授を訪れて、真相を話した。教授は、石岡が持参した各種資料を

検討した後「恐ろしいことがあるものです。注意しなくては」と慨嘆していられた。また石岡の弟若山富夫は、繊維機械学会に真相を伝えた。しかしこれらは、とるに足らぬ抵抗であつた。

ここにおいて一般社会では石原報告は偽りとみなされ、若山の死因も分らなくなつた。ザイルが岩角で切れないとすると本当の死因は何か、リーダー石原はなぜ偽りを報告したか、いずれにしてもこの仲間は、自分たちのミスをかくすため、偽りを報告してザイルメーカーに損害を与え、いたずらに世間をさわがせた不届きな仲間であると思なされるにいたつた。要するに私たちはもとより、若山の遺族も、いわば犯罪者の同類とみなされ、死にまさる不当の苦しみを受けたのである。今や蒲郡実験の影響は、現実のものとなつて私たちの周囲をとりまいた。若山の父は、息子の死んだ翌年「この事件を決してウヤムヤにするな」という遺言を残し、悲憤の中で病死した。

他方、蒲郡実験のもう一つの脅威が一般登山者を徐々に襲つた。岩角で弱点をもつナイロンザイルが、登山用具の権威者によって、弱点をもたないと思はされたことによる影響である。因果の原理は、容赦なく登山界を覆い、その後ナイロンザイルの切断が相つぎ、登山者が次々に死んでいったのである。それらのほとんどは、ザイルメーカーと著名学者によって行なわれた生命を売る手品にひつかかつて、生命を落したと思なされるのである。

東京製綱は、昭和四十八年にいたつて、私たちの主張が正しいとする世論の高まりと、相つぐザイル切断事故にたまりかね、ナイロンザイルは岩角で切れやすいこと、とくに八ミリナイロンは、ザイルではなく補助用である、と発表した。それにいたる十八年間、ザイルに添付するカードには、たとえば二・四トンに耐えるなど、登山者の滑落による切断は起りえないことを示唆するデーターのみを記し、ナイロンザイルが岩角で切れや

すいなど、弱点は一切表示しなかった。従って三十一年から四十八年までの十八年間に発生した、十名以上のザイル切断に係わる事故死の責任は、その大部分が蒲郡実験を行った東京製綱と篠田氏（篠田氏は国家公務員であるので、その賠償責任は国にもあると思われる）に、また責任の一部が後述のように「山日記」を訂正しなかった日本山岳会にあることになろう。

蒲郡実験を追及するための準備

この事件を追及するためには、そのまえに次の点が明らかにされなくてはならない。

- ① 若山の遺体が発見され、遺体に切断したザイルが結ばれていること。
- ② そのザイルの切断は、ナイフなどによるものではなく、岩角で切断したものであることが証明されること。
- ③ 事故現場とくに、ナイロンザイルが切断した岩角が確認されること。
- ④ その岩角またはその岩角と類似の岩角を用いた実験が行なわれ、その結果、石原報告の条件で新製品の八ミリナイロンザイルは切れるが、従来の麻ザイル十二ミリは切れないことつまり蒲郡実験の誤りを証明すること。
- ⑤ ザイルメーカーと篠田氏が蒲郡実験前に行った、ナイロンザイルが石原報告の条件で容易に切断することを示す実験の詳細を入手すること。

私たちは、これらの点が明らかになるまでは事件の追及は出来ないと考え、いまわしい風評の中で、歯を喰いしばって、それらの解明に努力した。とくに穂高の雪がとけ、遺体の搜索の機会がやってくるのを待ったのである。

遺体発見と加藤理事の話

七月三十一日、若山の遺体は、岩壁直下の雪の中から発見され、ザイルは正しく結ばれていた。八月四日、遺体を茶毘にした朝、まだ骨が熱くて拾えないので、石岡はいったん徳沢小屋にもどろうとして梓川のほとりまで来た。そこで偶然、三重県山岳連盟から公開実験の立会いに行った前記加藤氏に会い、話しこんだ。

加藤氏は四月二十九日、公開実験参観の帰路、東海道線の列車の中で、同じく実験を参観に来た東洋レーヨンの社員と会話した。その人たちは、篠田教授の二月以降のザイルの実験を手伝った人たちで、岩角ではナイロンザイルが麻ザイルの十分の一の強さしかないという実験データーを持っていた。加藤氏はそのデーターを見せてもらい、実験方法など詳細に書き写した。加藤氏は、かりに他人の実験データーであっても、そのデーターを知りながら発表しないでいることは、万一、新たにザイル切断事故が発生したとき、自分自身犯罪になるのではないかと判断し、そのデーターをガリ版印刷し、友人多数に配布された。それには、蒲郡実験でナイロンザイルが岩角に強かったのは、岩角が丸くしてあったからだとし記してある（『暁学園機関誌「鈴峯会」』）。石岡はその印刷物を入手した。

前記⑤の問題は、とくに解決困難であると考えていたが、若山を茶毘にした朝、この問題が解決したのであった。

現場調査とそれにもとづく実験（巨木の実験）

八月六日、石岡を含む若山の血縁関係者は、若山五朗の骨を持って、父母のまつ故郷へ向った。その後で伊藤らは、前穂高頂上に登り、現場調査

を行なった。石原が示したその岩角には、ナイロンの繊維束三種類が残っており、ザイル切断箇所を明示していた。またこれらの繊維束は長さが一定であった(三センチ)。後日の研究の結果、このことがナイロンザイルが岩角で切れた何よりの証拠となることが判明した。また伊藤らは、その岩角に石膏を流し型をとりまた事故発生時の位置関係を詳細に計測した(若山の遺体に結ばれていたザイルの切れ口は、岩角での切断を示す、特徴ある階段状の切れ方をしている——37頁参照——そのザイル、前記三種の繊維束、岩角の石膏その他の資料が、長野県大町市、山岳博物館に展示してある)。

九月一日、私たちは、石膏が示すものとよく似た岩角(88頁の写真参照)を松の巨木の枝に固定し、石原報告に出来るだけ近い実験(落下距離五〇センチの垂直な滑落と斜めの滑落)を行なった。八ミリナイロンザイルは容易に切断したが、従来の麻ザイルはほとんど傷がつかなかった。私たちはその報告書を作った(八ミリ映画にも収めた)。なおこの実験の詳細は、三十一年十二月発行の「岳人」に掲載された。

以上で事件追及のために必要な、前記①ないし⑤は、ことごとく解決し、準備は整った。

篠田氏との二回目の会見——重なる裏切り行為

ザイルメーカーと篠田氏が行なった実験の、社会と登山界への悪影響を除くには、篠田氏によってその訂正を社会と登山界に発表していただかなくてはならない。そのためには篠田氏に対し、私たちが行なった前記五つの点を説明し、蒲郡実験の訂正を申し入れなくてはならない。

十一月十八日、石岡、伊藤および遭難したパーティの一人であった沢田の父(三重県議)は、阪大で篠田氏にお目にかかった(前記新保氏が同席

された)。私たちは、遺体に結ばれていた八ミリナイロンザイル、切断した岩角に付着していた三種の繊維束、切断した岩角の石膏、切断現場の写真、松の巨木を使った実験の報告書、加藤氏が東洋レーヨンの社員から入手した篠田氏の実験データー(鈴峯会)、五月一日付中日記事、「化学」七月号の関根氏の記事、「山と溪谷」七月号の熊沢氏の記事等を見ていた。篠田氏は、「鈴峯会」記載の実験は自分が行ったものであること、蒲郡実験でナイロンザイルが強かったのは実験に用いた岩角が丸かったためであること、岩稜会が行った松の巨木を使った実験は正しいことおよび五月一日付の中日記事、「化学」および「山の溪谷」の記事は誤りであること等を認められた。私たちは、蒲郡実験のため、登山者に危険な状態が発生しているし、石原と若山の遺族は無実の批難をうけて苦しんでいるがこれを解消するためには、篠田氏からナイロンザイルは岩角で弱く、石原報告の条件で切断することつまり蒲郡実験の訂正を一般社会に対して発表していただかなくてはならないと要望し(口頭と文書で)、篠田氏は了承された。

十二月二十日、篠田氏から手紙を受けとった。それにはナイロンザイルは石原報告の条件で切断すると記してあったが、それを社会に発表する点については何らふれられてなかった。篠田氏は蒲郡実験で、ナイロンザイルは石原報告の条件で切れない実験を行なわれた。一方、篠田氏は書面で石原報告の条件で切れると記しながら、蒲郡実験を訂正しようとはされないのだ。

訴訟の決意と準備

篠田氏が人間として当然なさるべき約束を違反されたことにより、私たちは蒲郡実験が、真実をまげ、一般登山者の生命を犠牲にしてまで、事故

の責任を使用者に転嫁させるためのものであったことを、いっそう確信した。篠田氏とザイルメーカーの間に、もしもいまわしい取引がなかったならば、十一月十八日の約束は果されなければならないからである。

しかしともかくもその犯罪が強行された以上、私たちが蒲郡実験の訂正を要求しても、実現は困難であろう。もはや話し合いによる解決は不可能であろう。それならば法廷闘争しかない。しかしながらとくに当時の企業優先、庶民の人権無視、金脈横行の社会では、それと戦っても勝目はないであろう。そのことを計算に入れての犯罪にちがいないからである。しかしながら、だからといって手をこまねていることは、人間として出来ないことであつた。かなわぬまでも可能な限りの努力をすることはこの世に生を受けた者の義務ではなからうか。いやそれどころか、正義のために勝利なき戦いを戦かうことは、男子の本懐ではなからうか。住みよい社会は、政治家が与えてくれるものではない。自からの努力によって、つかみとってゆかなくてはならないのではなからうか。

しかしながら、他方において、たとえ追及の目的は正しくても、その方法が誤っていたり、ゆきすぎがあつては、社会にとってプラスとはならないであろう。私たちは、この事件をいかに追求するかを、名大教官はじめ多くの人々のご協力をえて、いろいろと研究した。

十二月二十四日、岩稜会は臨時総会を開き「蒲郡実験によって醸成された登山者の生命の危険と、私たちにかけられている無実の不名誉とを解消するためには、今や訴訟もやむをえぬ情勢となった。従つて今後、蒲郡実験訂正の交渉は、訴訟含みのものとし、それが受け入れられないときは訴訟する」という決定をなした。それと同時に石岡は、岩稜会から自発的に退会し、伊藤が会の代表となった。

私たちの目的は、本質的には企業と学者のモラルを正すというものであつて、金銭とは関係のないものである。しかるに当時登山界には、石岡は

ザイルメーカーから慰謝料をもらいたいために、何の関係もない篠田氏を困らせている、という風評があつた。しかし岩稜会が、金と無関係な仕事のつもりでいても、会の責任者が犠牲者の肉身ということでは、その点を誤解されるおそれがあつた。ただし石岡が退会しても、今後とも実際の仕事はこれまでどおり石岡が中心になってやる。ただ石岡のやった仕事に私情が含まれていないかどうか、会は、石岡を含まない場で検討するという形をとつた。

「山日記」問題、発生する

昭和三十年も暮れ三十一年を迎えた。私たちは、発行されたばかりの日本で最高の権威をもつ日本山岳会発行の「山日記」の中に、篠田氏執筆の登山用具の記事を見つけた。前記のごとく篠田氏は、昨年十一月十八日、石岡、伊藤に対し、ナイロンザイルは岩角で弱く、石原報告の条件で切断することを公表すると約束されたので、私たちは「山日記」を見たとき、篠田氏は「山日記」によってその約束を実行されたのかと、一瞬喜んだ。しかしその内容はそれとは逆のものであつた。

それには、九〇度の岩角にナイロンザイルをかけて落下衝撃実験を行なうと、十三メートルまで耐えるが、麻ザイルは三メートルで切断すると記してあつた。(42頁参照)これは第三者に、ナイロンザイルは九〇度の岩角で強いこと従つて石原報告は虚偽であり事故死の責任はメーカーにはないことを一点の疑いもなく推知せしめるものである。しかしながらこの実験データは、岩角を丸くして行なつた蒲郡実験のときのデータのやつである。

私たちはこれを見たとき、再び目の前が真暗になつた。篠田氏が「山日記」に、この実験データを記載した目的は、「山日記」が有する絶対の

信頼性を利用して、蒲郡実験で国民に与えた恐るべき錯覚を、さらに確実強化させることにあつたにちがいない。すなわち蒲郡実験では報道機関を欺くことによつて社会を欺いたが、今回篠田氏は、自から積極的に登山界と社会を欺いたのである。篠田氏は昨年十一月十八日私たちに「ナイロンザイルは九〇度や四五度の岩角で強く、前穂高での事故はナイロンザイルの切断ではないようだ」と報じた五月一日付中日の記事は、誤りだと語られながら、今回、自からその誤りを発表されたのである。私たちは、篠田氏の研究目的が「事故原因の究明と登山者の安全」というものから、何時のまにか「企業のために登山者の生命を犠牲にしても止むをえない、岩稜会の人権など問題にならない」というものに変換した、としか考えられない。企業のために登山者の生命を売ったとしか考えられない。同時にザイルメーカーと篠田氏は、私たちに追及への努力をあきらめさせるために、日本山岳会という強固な壁を、はりめぐらせたものであろう。篠田氏は、日本山岳会の関西支部長である。少しも疑がわれることなく、犯罪の防波堤を作ることが出来たのである（後から述べるように、この壁を除くのに二十一年かかった）。

それにしても、前穂高の条件でナイロンザイルは切れないという虚構を、社会に固定化するために、「山日記」を利用することは、他面、不特定多数の登山者への殺人行為を拡大強化することである。この恐るべき犯罪に日本山岳会をまきこむとは、何という破廉恥なまた国民を愚弄した行為ではなからうか。ナイロンザイル事件は、山日記問題という、蒲郡実験を上回る犯罪を追加したのである。同時に私たちは、蒲郡実験の訂正はもとより、真実を明らかにすることさえもきわめてむづかしくなったことを痛感した。同時にこのような強力な知能犯罪の前には、もはやナイロンザイル切断事故の続発に、歯止めをかける道はなくなったことを知った。

篠田氏の「山日記」の記事の中で、私たちが問題としているもう一つの点は「新製品（ザイル）」が出たときには、優れた点だけが強調されるので注意しないと万能と思ひ勝ちである」と記してある点である。これについて私たちの主張は次のようである。ザイルのように直接生命に係わる品物が、長所のみを強調して販売されたのでは、もはや事故防止はなりたない。一般登山者はザイルの性能をチェックする装置を持たないからである。またこの記事は、生命に係わる品物を扱う業者に課せられた事故防止のための注意義務を、あいまいにさせることにつながるおそれがある。またこの記事には、ザイルメーカーと篠田氏の深慮遠謀が感ぜられる。つまり将来、保証付強力ナイロンザイルとして販売したものが、実はザイルとは言えない補助用であつたことが判明したときでも、事故の責任は、それを見ぬくことの出来なかつた使用者の注意不足にあることを、今から一般社会に印象づけておこうという意図が、私たちに感ぜられる。

それにしても岩角を丸くした実験データの発表といい、この記事といひ、一般登山者の安全と正しい人権を守ることをつねに留意していなくてはならない国家公務員として、また公的性格を有する日本山岳会関西支部長として、正気の沙汰とは思えないのである。

最近、毒入りココロラ殺人事件が凶悪犯罪としてさわがれているが、私たちはナイロンザイル事件も、それとよく似ていると考えている。生命に係わる欠点を表示しないどころか、逆に安全だという記事を、最高の権威者が最高の権威をもつ文獻に発表し、一方その品を店頭に並べておく。このことは、毒入りココロラを、一見安全のように見せて、電話ボックスに置くのと本質的に変わるところはない。それどころか電話ボックス中のココロラには、疑いをはさむ者はいるかもしれないが、「山日記」に疑惑を持つ者は千人に一人もいないであろう。

さらにコーラに毒を入れた犯人が逮捕されたとき、その犯人は「死の責任は、コーラに毒が入っていることを見ぬけなかったコーラ飲用者の注意の足りなさにある。自業自得だ」と反論するであろうか。かりにそう反論したとき、警察は「成るほど」といって彼を釈放するであろうか。「山日記」によって、その点まで予め伏線が設けられていることは、驚くばかりである。

また両者の大きな差は、毒入りコカコーラでは犯人に何らの利益を与えていないが、ナイロンザイルの方は、企業は販売によって利益をえているのである。また毒入りコカコーラは、警察当局が懸命になって犯人を捜索しているが、ナイロンザイル事件では、犯人は明らかであるのに当局は少しも追及しようとはしない。しかしこれでは強い悪とか知能犯罪は、はびこるだけであろう。

名誉毀損罪による告訴と

印刷物「ナイロンザイル事件」の発行

さていよいよ追及のための行動を開始した。三十一年三月二十四日と四月十日の二回、篠田氏に「面会したい、内容は重大である」という趣旨の内容証明の書簡を出したが、いずれも公務多忙等の理由で拒否された。私たちは六法全書を開く日が多くなった。六月二十三日、石原は篠田氏を、時効の前日、名誉毀損罪で告訴した。大要は「篠田氏は、若山五朗の死因に関して、ナイロンザイルが切れたという石原の報告が正しいことを承知しながら、石原の報告は偽りで、死因は別にあることを推知せしめる実験を公開された。これは名誉毀損罪に該当する」というものである。二人の弁護士も熟考してくれたが、名誉毀損罪以外にみあたらなかった。蒲郡実験以後この時点では、ナイロンザイル切断による死亡事故は発生していなかった。告訴の目的は蒲郡実験の追及であるがとりあえずの目的は、告訴によって

社会に真実を知ってもらい、ナイロンザイルの弱点を明らかにして、次の犠牲を防止することであった。真実を社会に知ってもらうためにはジャーナリズムがとりあげてくれなくてはならない。従ってこの告訴をジャーナリズムが問題にするかどうか、一つの山だと考えていたが、翌日の新聞、ラジオはいっせいに大々的に報道した。とくに中日新聞は真相を察知していたので、つまりメーカーと篠田氏にだまされたことを知ったので、異例に大きく掲載した（42頁参照）。

三十一年七月一日、印刷物「ナイロンザイル事件」三〇〇頁を一五〇部作成、知人、ジャーナリズム等関係方面に配布した。著名大学教授を刑事事件で告訴するということは、容易ならぬことであり、しかも告訴人が田舎の山のグループということでは、告訴した方が狂人あつかいされてしまうであろう。私たちは告訴の理由と、それにいたった経過を、告訴と同時に社会に訴えねばならないと考え努力したが、告訴の日には間にあわなかった。「ナイロンザイル事件」という言葉をここで初めて使った。

冒頭に「宣言」として「この事件は民主主義にとって、また生命尊重にとつてきわめて重大であるので、納得できる結果をうるまでどこまでも追及する」という趣旨を大書した。またこの印刷物には、関連する多くの問題点を記したが、とくに「山日記」の訂正を強く求めた。この印刷物は、日本山岳会へも送付したが何の反応もなかった。

井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなる

三十一年九月、印刷物「ナイロンザイル事件」が安川茂雄氏を経て作家井上靖氏の入手されることとなった。また私たちはそのことで井上氏に会った。井上氏はいくつかの質問をされた後、小説のモデルにしたいと申し出られ、十一月、朝日新聞に「氷壁」として連載された（五十二年一月

十四日付日本経済新聞「私の履歴書」欄で井上氏は、この間のいきさつを詳しく記していられる。

なお井上氏は、適当なロマンスをつけたいということであった。小説になったのを見ると遭難した若山（小説では小坂）と、篠田氏（八代教之助）の奥さん（美奈子）との間に、肉体関係があることになっており、これには驚いた、また私たちは、この小説の内容にはやや不満であった。ナイロンザイル事件の核心は、ナイロンザイルが石原報告の条件で切れるという実験を行っていた篠田氏にとっては、切れないことを示す蒲郡実験は、いわば「手品」であった、という点である。問題は、篠田氏が蒲郡実験前に弱い実験をやっていた点であるが、小説「氷壁」には、その肝心な点がない。井上氏にその点を何度も指摘した（井上氏は最初はそのつもりのようにであった。井上氏は、名古屋まで出向いて前記加藤富雄氏に会いたいたと言われたので、石岡は加藤氏と名古屋駅で待つ手はずをしていた。しかしその直前電報で取り消された）。結局井上氏は、それでは善玉、悪玉小説になって井上文学ではなくなってしまうということであった。考えてみると小説とモデルとは本来、異なるものである。私たちは、事件の追及に懸命のあまり、井上氏に無理をいうことになってしまった。

奈良・吉野会議

私たちは、三十一年十一月二十二日、奈良の吉野で全日本山岳連盟の評議員会が開催されることを知った。事件を追及するための一つの方法として、篠田氏が評議員をしている全日本山岳連盟に、三重県山岳連盟から、この問題を緊急動議で提出してもらうことを考えた。三重県山岳連盟は緊急理事会を開いてこれを承認し、二十二日の評議員会に緊急動議として提出した。また二八頁からなる印刷物を用意した。

緊急動議の内容は「登山界に告訴事件が発生したことは不幸なことである。しかしその内容は、事故防止に関係するものであるので、全日本山岳連盟は、問題を検討し、正しい解決を示して、円満解決に向かうよう努力していただきたい」というものであり、また配布した印刷物には七項目の問題点を記した。その中で「山日記」訂正要求が最重要点となっていた。緊急動議のことは、七項目の問題点の要旨とともに、二十三日の朝日新聞の朝刊に、トップ記事で掲載された。

しかしその後全日本山岳連盟は、この問題を、公式の場で取りあげたということを聞かない。この問題は、日本山岳会会長某氏からいただいた書面に指摘されているように、全日本山岳連盟にとって荷が重すぎたようだ（このときの評議員会の書記をされた、横浜税関山岳部の植木知司氏が、三十三年四月発行の会報「樺火」八五号「世にも不思議な物語り」、「氷壁」の背後にあったものという見出しで、緊急動議のときの状況を記している。しかしこの記事には結論に誤りがある。すなわち「その後、全日本山岳連盟のあっせんによって、東京製綱もナイロンザイルの弱点を認め、実験を行なった篠田教授も遺憾の意を表し、石原氏はここに告訴を取り消し、長い年月問題になっていたナイロンザイル事件も、ここにめでたく解決を見ることが出来た」と記してあるが、いうまでもなくこれは誤りである。植木氏は正しい解決を促すために、誤りを承知で記されたのではないかとさえ思う。ともかく全日本山岳連盟の内部にあってさえも、この当時すでに、この事件の正しい解決がどこにあるかを、認識されていた人がおられたことは、十分にうかがわれる。当時もしこの認識が拡大され、全日本山岳連盟の主流を占めることになっていたらとすれば、企業生命軽視の姿勢が是正され、ザイル販売にさいして欠点が表示されるようになり、その後が発生したザイル切断による十名以上の死亡事故は、防止されていたか、激減していたと思われる。現在の登山の最大の組織、日本山岳協会は前者

の轍を踏まないよう自戒していただきたい。

不起訴の裁定

若山五朗の父は、評議員会の二十日後に悲憤の中で病死した。また三十二年二月、「氷壁」が大映から映画化された。

私たちは各種の情報から告訴が不起訴になることは決定的と考えざるをえなかった。従って告訴を有利にするための努力をしてみても、無駄骨になるにちがいないと思ったが、それでもある程度努力した。

名古屋大学法学部信夫清三郎教授の兄上が、朝日新聞の専務であるので石岡と伊藤は、信夫教授の紹介状を持って信夫専務にお目にかかった。信夫専務は、直ちに井上靖氏に電話され、事実を確かめられると週刊朝日の小松恒夫氏を呼び、ここに「ナイロンザイル事件」という見出しで二頁が掲載されることが決定した。その記事は六月二日号に掲載された。この中に篠田氏の「蒲郡実験は、穂高での遭難とは無関係である」という談話ののっているが、いうまでもなく偽りである（蒲郡実験では既述のように、前穂高のときの位置関係と称して実験が行なわれている。また阪大工学部発行の欧文による論文集に篠田氏ほか二名執筆の論文が掲載されているがその中に、蒲郡実験等は岩稜会ほか二件の、ナイロンザイル切断事故の原因を明らかにする目的で行った、と記してある。要するに篠田氏が名誉毀損罪から逃げる道は、この明らかなウソを表明する以外にない。蒲郡実験の犯罪性は、この談話だけでも明白である。

また石岡は大阪に出向いて、担当の斉藤検事に会ったり、学識経験者二七氏を回って斉藤検事あての要望書に署名してもらって発送したりした。しかし結局、三十二年七月に不起訴の決定があった。覚悟はしていたが現実のものとなってみると、衝撃はないではなかった。しかしそれよりも

朝日新聞に、検察当局の判断として、篠田氏の行為は良心的と発表されたが、これは夢想だにしていなかった。これでは善悪の判断はどうなるであろうか。企業や学者は何をやってもよい。一般庶民は殺されても文句いえない。徳川時代と変るところはないと身をもって感じた。正木ひろし弁護士から「裁判検察官憲に正義を求めることは、木によって魚を求めるがごとし」という手紙をいただいた。

後日、検察当局から石原あて、不起訴理由の通知—公文書—が送付されたが、それには「公開実験に使用した岩角は、石屋によって、九〇度の岩角には〇・五ミリのアール、四五度の岩角には二ミリのアールがそれぞれつけられてあった。その理由として、運搬のとき角が欠けるといけないから」と記してあった。

なお岩角を丸くした点について篠田氏監修の「ザイル」という本には、三十年四月二十九日の実験に使用した岩稜として「実験用岩角の構成は、いずれも稜には一ミリの面をとってある。面とりしないものを作ると、実験ごとにザイルの摩擦のために岩稜が小さく欠ける。これでは数百回の実験の正確さの意味がなくなる。これで防ぐため稜には一ミリ面をとってある」と記してある。いったい一流学者の実験で、実験データーをそろえるために実験装置の方を細工するということがあるのだろうか。もちろん蒲郡実験は、単なる学問上の実験ではなく、事故死の原因を明らかにすることと、登山者の安全という社会的にきわめて重要な目的をもっている。篠田氏の言動によって、万一にも社会に誤った印象を与えてはならないのである。また前記「ザイル」の中では、四五度と九〇度の岩角での衝撃実験のデーターが、六十四並べてあるがいずれも岩角を丸くしたもののばかりで、そうでないものは一つも記載されていない。前記したごとく蒲郡実験のとき加藤氏の注文によって、石原報告の位置関係という説明で、斜め落下の実験がなされたが、その実験データーがこの中で図入りで掲載されている。

また「山日記」に掲載された実験データは六十四のうちの一つである。このような状況の中で「山日記」の「ナイロンザイルは九〇度の岩角で十三メートルまで安全」という記事は、訂正されないどころか、この書の発行によって信頼性をいっそう高めたのである（この書のもつ重大な矛盾は後記するように、四十七年六月に発表された三重県山岳連盟の見解に示してある）。

石原の告訴は不起訴となり、ナイロンザイルが岩角でも強いということでは登山界に固定した。たとえば山崎、近藤両氏著「積雪期登山」の中で、東京製綱の雨宮氏は「ナイロンザイルは非のうらどころがない」という助言を与えておられ、ナイロンザイルが岩角で切れやすいことには、少しもふれられていない。私たちは、ザイル切断による次の犠牲が間近かにせまっていることを、感ぜずにはいられなかった。

東京製綱全面的に陳謝、ただし正しい解決とはならず

三重県山岳連盟は、問題を全日本山岳連盟で検討してもらおうとして失敗したので、次は、東京製綱に対し、要旨「三十年一月二日、前穂高で発生した若山五朗の遭難死の原因は、東京製綱が強力ナイロンザイルと称して販売したものが、ザイルとしての性能をもっていなかったからである。従ってその責任は東京製綱にある。私たちはそのように考えているが貴意を得たい。もし返事が、今後の影響上悪いと考えた場合には、業務上過失致死罪によって告発する。なお返事は、時効の関係から三十二年十二月二十五日までにいただきたい」という文書を、全日本山岳連盟副会長尾関氏に依頼して、東京製綱の三木会長に渡していただいた。

尾関氏から伊達三重県山岳連盟会長に送付された書面によれば、尾関氏は三十二年十二月二十日、三重県山岳連盟の書面を三木氏に渡し、高柳氏

とともに二時間にわたって懇談した結果、三木氏は、三重県山岳連盟の書面に少しも異存なく（注意義務に反していたことを認められた）、また「ザイルについては、一層の研究を重ねて、売り出すときには、その使用についての注意書を添付する」ことを約束された（注意書添付のことは、三十四年三月二十八日発行のアサヒグラフの中で、東京製綱取締役は木義明氏が約束している）。さらに東京製綱では近く、ナイロンザイルの欠陥を改良した新製品テリレンザイルを売り出すことになるが、その第一号を若山五朗氏の霊前に供えたいということであった。

さてナイロンザイル事件は、ザイルメーカーの誠意によって、正しい解決に向って動き出したようにみえたが、実はそうではなかった。尾関氏と三木氏との約束のうち、事故防止にとって大切なのは、ザイルメーカーがザイルを販売するとき、ザイルの弱点を明示した説明書を、ザイル一本ごとに添付するという点である。三重岳連としては、説明書をつけるという、ザイル業者の言葉を信じたのであったが、結果は、東京製綱は、前記したように引張り強さ二・四トンなど、ナイロンザイルの長所を強調するカードを添付しただけで、事故防止にはむしろマイナスとなり、約束違反もはなはだしいことを知った。しかしこの時点では、告発の時効も経過し、なすすべがなかった（ザイル業者が約束を違反してまで、ザイルの長所のみを強調する背景には「新製品が出たときには、長所だけが強調されるので注意しないと万能と思いがちである」という前記「山日記」の記事が関連していたのではなからうか。山日記のこの記事が訂正されない限り、業者への要求は無力なものではなからうか。もっとも後で記すが日本山岳協会常務理事K氏が四十七年十二月発行の「岩と雪」二八号で、「ザイル業者は、ザイルの欠点を明らかにする必要がある」と記されているので、尾関氏や三重県山岳連盟の努力が空廻りになるのも無理からぬところである。それにしても約束しながら平気でくつがえすことにはガマンがならない）。

次に約束の第二点、新製品テリレンザイルの第一号を、若山五朗の霊前に供えるという点については、その約束は実行されテリレンザイルが贈られてきた。しかしそのテリレンザイルは、後年に判明したことだが、ナイロンザイルのエッジでの弱点が、少しも改良されていないものであった（四十年六月、奥多摩でのトレーニング中に、テリレンザイル十一ミリが切断し、大学生が死亡した。現在テリレンザイルは事実上影をひそめた）。

ザイルメーカーは改良されてもいないものを改良されていると平気という。しかも、生きている登山者どころかザイルが切れて死亡した者の霊にまでウソを言う。私たちはその非道なやり方に対し心からの怒りを感じたのであった。全日本山岳連盟機関誌「全岳連」第五号には「東京製綱は岩稜会に対し、新製品テリレンザイルを贈って、一切のことについて深甚なる陳謝の意を表したので円満解決した」と掲載されたが（48頁参照）、それは正しい解決とは似て非なるものであり、欠陥ザイル、テリレンを優秀品とみせかけるための宣伝であり、国民の生命をもてあそぶ死の商人の性格は少しも改められていなかった。

不起訴以後の追及―公開質問状

石原の告訴は不起訴となったが、私たち岩稜会としてこの後の追及をどうするか。公的な方法として① 抗告、② 民事訴訟に切りかえる（篠田氏に対し「ナイロンザイルの性能と、若山五朗氏の死因について、一般社会に誤解が生じた責任は、私が行なった蒲郡実験にある、申訳ない」という記事を新聞に掲載することを要求する）③ 検察審査会に訴える。以上の三つがある。しかし弁護士をはじめ専門家の話を聞いて研究したが、このような社会の中ではとても成算がもてないという結論となり、結局、公開質問状で追及することにした。篠田氏は国家公務員であるので、篠田氏

に関係のあることで、公けの利益に関することについては、市民の質問にノーコメントとは言えなからうという趣旨である。三十三年二月二十二日第一回発送、新聞、ラジオの反響は、告訴のときよりはるかに大きく、ナイロンザイル事件はこの点から出発したといってもよいくらいであった（44頁参照）

ナイロンザイル切断事故発生―中日新聞との交渉

第一回公開質問状発送から十日もたたないうち、私たちが恐れていた事態がいつに発生した。三月二十八日、神戸大学山岳部員二名、穂高で墜死、ナイロンザイルが切断していた。ザイルの切断部は階段状をなし、岩角での切断を示していた。

四月二日、石岡は中日新聞に対し「三十年五月一日付の貴紙には、篠田教授の公開実験の結果として『ナイロンザイルは岩角でも強い。石原報告の条件でナイロンザイルは切断しない。穂高での事故の原因はザイル以外にあるようだ』と掲載されたが、いうまでもなくこれは誤りであり、このため登山者に危険が生じ、またわれわれは重大な迷惑をこうむった。われわれはその誤りを正すために、実験責任者、篠田氏を告訴したが検察当局は、篠田氏に責任はないとの判断を示した。そういうことになると思われる。これは、同記事の責任が全面的に貴社にあると考えざるをえない。これについて貴社の返答をいただきたい」という趣旨の書面を作り、夕刻、中日に持っていった。

このとき中日では、たまたま翌日の朝刊のゲラの一部ができており、それを石岡にみせた。石岡は、これをもって返答に代えたと伝えた。その記事（六段ぬき）の概要は「去る三月二十九日、神戸大学生二名が穂高で墜死し、ナイロンザイルが切断していた。阪大工学部教授、当時日本山岳会

関西支部長篠田氏は、三十年四月二十九日、ナイロンザイルが岩角にかかった場合でも麻ザイルの数倍強いという実験を公開した。また前穂高で発生した遭難事故と同一条件という実験がなされ、八ミリナイロンザイルは切れなかった。そのため若山君の死因に関し大きな疑惑が生れた。しかし公開実験でこのような結果が出たのは、実験に使った岩角が丸くしてあったためである。また篠田氏は同実験前に、ナイロンザイルが岩角できわめて弱い実験を行っていたが、今でもそれは発表されていない。もしこの欠陥を示す実験が発表されていれば、今回の神戸大学生の事故も防止できていたかもしれない」というものであった。(43頁参照)

篠田氏の虚偽の声明発表

― ナイロンザイル事件の前段終了する

三十三年十月十六日、第二回公開質問状発送、十月二十二日、篠田氏の声明が新聞、ラジオで発表された。要旨は「三十年四月二十九日の公開実験は、グライダー、船舶の曳航繩に関するものであり、登山とは無関係」というものであった(篠田氏のこの声明は、現在まで少なくとも七回、新聞で報道されており、―45頁の報知新聞参照― 報道機関にはそのときの録音テープが残されているということである)。

三十三年十一月七日、第三回公開質問状の発送について三十四年八月三十日、「ナイロンザイル事件に終止符を打つにさいしての声明」(二〇頁)を発表した。要旨「篠田氏の十月二十二日の声明はとんでもないウソである。これがウソであることは、万人の認めるところである。それどころか篠田氏自身、学会報告書の中で、蒲郡実験は、前穂高での岩稜会の遭難原因究明のためのものであったと記していられる。私たちは、蒲郡実験での篠田氏の行為が、もしも良心的であるということならば、一般大衆の

生命を守るうえに重大な支障をきたすと考え、良心的でなかったことを客観的に明らかにすべく、これまで努力してきたが、今回の篠田氏のウソの発表によって、その点が明白になったと考える。また篠田氏自身反省していられるにちがいない。従って私たちは、私たちの目的を、最小限ではあるが達したと思うので、この事件に終止符をうつことにした。しかし篠田氏がこの声明に反論されるならば、どこまでも続けるであろう」というものである。結局、反論なく、ナイロンザイル事件に終止符をうったのである。この声明も大々的に報道された。結局、篠田氏のこの明白なウソによつて「篠田氏の蒲郡実験における不可解な行動は、篠田氏が企業に買収されたためであるという説明以外にはない」と三十三年七月発行の「岩と雪」1号に記したことがはっきりと証明された。篠田氏は、ウソなくしてはこれに反論できなかったからである。同時に、このウソの発表によつて石原の名譽毀損罪による告訴は、成立すべきものであったことが明らかとなった。同時に、非力な私たちはこの状態をもつて、不満足ながらも正しい解決を得たとしてナイロンザイル事件を終結させたのである。

声明書を各方面に発送し、多くの人々からねぎらいの手紙をいただいたが、とくに今西錦司氏から「長期にわたる抵抗、ほんとうによく戦かわれました。ご苦勞様でした。敬意を表します」という書面をいただいた(今西氏の書面公表のこと、今西氏の了解すみ)。

ザイル業者の注意義務欠除―

「山日記」の影響拡がる

ここでナイロンザイル事件の、いはば前期が終了し十年の歳月が流れる。しかしこの間、ザイル業者はザイルの販売にさいして、ザイルに添付するカードには、前記したように、切断はありえないことを思わせる数字のみ

を記し、弱点をいっさい表示しなかった。一方、ザイル切断による犠牲者は後を絶たない（58頁、54頁参照）。

石岡は、三十八年七月初め、ナイロンザイル切断のため二名の死亡事故があったとき、八月三十一日の朝日新聞「観覧席」の欄で「ザイル業者は、ザイルの長所だけでなく生命に係わる欠点も示すべきだ」と訴えたが、何の変化もおきなかった。考えてみると、「山日記」が改められない以上、業者が自ら改めるなどということはあろうはずはなかった。そういう意味では相いつくザイル切断に係わる事故死の責任は、篠田関西支部長が果たした役割といい、日本山岳会のその後の行動といい、結局ザイル業者よりも日本山岳会の方に比重が大きいのもかもしれない。私たちは、私たちの努力が空振りに終るたびに、それを痛感するのであった。日本山岳会という壁の厚さをうらめしく思った。

昭和四十五年四月発行の「山と溪谷」には、ナイロンザイルの衝撃実験に関する多くのデータが「特別レポート」として発表されたが、それらは、ナイロンザイルはその後改良が加えられ、九〇度の岩角ではもはや切断しないことを示唆するものであった。石岡はそれを見てがく然となった。その記事には、それらのデータが作られた実験装置の写真が示してあるが、それは昭和三十年、東京製綱蒲郡工場に設置された例の蒲郡実験のさいに使われたものである。しかし岩角を丸くした実験データであることは、全く記されていない。ザイルメーカーには蒲郡実験の反省がないどころか、憶面もなく、角を丸くした岩角を使った、殺人につながる実験データを出しつづけている。一般登山者にいったいどういふ恨みがあるというのか。石岡はただ天を仰いで嘆息するのみであった。しかしながらこの場合も「山日記」というお手本がある以上それが訂正されない以上、「山日記」の二番煎じ「特別レポート」を責めることは、できないことであった。

「山と溪谷」に「特別レポート」が発表された二ヶ月後の六月十四日、奇

しくも同じ日に別々の場所、引張り強さ二・七トンの同種のナイロンザイル二本が、いずれもわずかに滑落で切断し、二名が死亡した。岩角にはナイロンの糸屑が付着していた。これをジャーナリズムが大きく報道し、ナイロンザイル事件は再燃した。

八月一日、東京製綱とは別のザイルメーカー（東京トップ）による実験が公開されたが、そのときは岩角を丸くしなかったもので、十五年間にわたって改良されたナイロンザイルも、九〇度の鉄製エッジでは、六〇キログラムの錘り、一・五メートルの落下で切断した。六〇度では、一人一人ぶら下っただけで切断した。ここにおいて蒲郡実験は生命を売る手品であり、また日本山岳会が「山日記」によって、それを権威づけたものであったことが、白日のもとにさらされた。もしも蒲郡実験で、角を丸くしない実験が行なわれていたならば、また「山日記」に角を丸くしない実験データが記されていたならば、今回の公開実験は必要ではなかったのである。十五年の間隔を置いて、ザイルメーカー自身によって行なわれた二つの公開実験の間の犠牲は、すべて犬死であった。蒲郡実験と「山日記」は、人間の民主的な進歩を十五年間停止させたのである。

安全限界内での死亡事故

「特別レポート」を掲載した「山と溪谷」社は、ことの重大さに気付き四十五年十二月発行の「岩と雪」で、「ザイル切断死亡事故に関する座談会」の記事を掲載したが、その見出しには「絶対に切れないザイルはないはずである。しかしそれがクライマーの安全限界と考えている範囲内で切れてしまったらどうなる」と記した。

安全限界内での事故の原因は、いうまでもなく「山日記」と「特別レポート」、とくに権威ある「山日記」の記事（十三メートルまで安全）にあ

る。今こそ「山日記」が、どんなに恐いものであったか、第三者によって、その因果関係が指摘されたのである。

これを別の例で言いかえると、たとえば「一般社会は、その薬の安全限界を十三錠と考えていた。しかるに、それよりも少なく飲んで死亡した者が続出した。その原因を調べてみたところ、その道の権威者が、もともと権威ある文獻に、その薬の安全限界は三錠であることを知っていたながら、それを隠して、安全限界は十三錠と発表していたためであった」というのと同じである。

いわば、不正な金を受けとった容疑だけのロッキード事件でも或いは不都合な電話をかけただけでも、厳しく追及されるのである。相手が元首相であろうと判事であろうと悪事は帳消しとはならない。それどころか社会的地位が高い者ほど、社会に及ぼす害毒は深刻であり問題は重大なのである。今回のような国民の生命を直接奪う大企業と著名学者である国家公務員の犯罪が、野放しであつてよいであろうか。

ナイロンザイル事件の追及再開――

石岡、ザイル実験装置を製作する

ここで私たちは、再び立ち上る決心をした。ここから「ナイロンザイル事件」は後半となるわけである。後半での私たちの主要目的は、ザイル業者にザイルの欠点を表示させること、日本山岳会に「山日記」の訂正をさせることである。これなくしては、ザイルに係わる事故防止は空虚なものとなるであろう。石岡は、四十六年一月発行の山岳雑誌「山と仲間」でその点を厳しく追及した。

また同年七月、勤務先の国立鈴鹿工專に、高さ五メートルのザイルの実験装置を作った。これは最新の電子装置を用いザイルが落下衝撃を受けた

とき、ザイルに作用する張力の大きさの測定はもとより、そのときの張力の変化の波形をも画かせることができるもので、従来見られなかったものである。ザイルがあたるエッジには、角を丸くしたもの、丸くしないものの、鉄製エッジや各種自然石等を用いた。また麻、ナイロン、テトロン等市販されている各種ザイルを実験に供した。しかしながらこれらの実験設備から得られた結果は、石岡が三十年に行なっていた木製の実験台や巨木を利用した実験の結果と、本質的に同じものであった。

三重岳連の見解発表――

その反論――またその反論

四十七年一月、三重県山岳連盟理事会は、前記実験装置による実験を見学したが、理事らはいずれもナイロンザイルのあまりのよろさに息をのんだ。三重県山岳連盟は、岩稜会の目的を岳連の目的とすることに決定、「ナイロンザイル問題小委員会」を発足させ、四十七年六月、「昭和四十五年六月十四日に発生したナイロンザイル切断による死亡事故の責任と、今後同種の事故を防止するために必要な措置についての見解」二三頁を発表した。この中で、今後の事故防止のためには、ザイルメーカーがザイルの販売にさいして、生命に係わる弱点を記したパンフレットをザイル一本ごとに添付すること、日本山岳会は三十一年度版「山日記」の「ナイロンザイルは九〇度の岩角で一三メートルまで切れない」という記事および「新製品（ザイル）が出たときには長所のみが強調されるので万能と思いがちである」という記事を訂正すること、その他これまでくり返し主張してきた多くの問題点をふたたび強調した（前記篠田氏監修の「ザイル」の中の、重大な矛盾も指摘した）。

この見解は大きな反響をよび、まず朝日新聞に二回にわたって大々的に

掲載された。それには日本山岳協会小島六郎副会長の「メーカーはザイルの弱点を表示すべきだ。そこから使用者にも自衛手段が生れる。三重県の岳連が指摘するところである」という談話が掲載された。さらに四十七年十月発行の「岩と雪」と日本山岳協会発行の機関誌に、見解の概要が掲載された。

それに対して同年十二月発行の「岩と雪」で、日本山岳協会常務理事K氏は「ザイルメーカーは、ザイルの生命に係わる弱点を明らかにする必要がある」と真向から反対を表明された。

これに対し三重県山岳連盟は、四十八年二月発行の「岩と雪」で「公共的性格を有する日本山岳協会は、遭難防止を、会の目的の一つとしているが、こういうことで登山用具に関する遭難防止が出来るか、K氏は、業者に課せられた事故防止のための注意義務を、形骸化しようとしているのではないか。この問題は登山者の生命に直接係わる問題であり、結着をつけなくてはならない」と反論した。

篠田氏とかK氏（K氏は日本山岳協会の常務理事でもある）によれば、業者は、生命に係わる欠点をかくし、長所のみを強調して販売すればよいことになる。たとえば前記、岡崎市のY氏が「この会社ではこのような非人道的なことが平然と行なわれていた」という怒りは、篠田氏やK氏にとってはナンセンスなものとなる、企業をして、企業に課せられた事故防止のための注意義務を守らせようとする、三重県山岳連盟を中心とする人々の努力に対して、日本山岳協会は、自から企業の前にはだかつてそれを妨害しようとしていないようにさえ思える。日本山岳協会と企業とのみにくいゆ着ところのさわざではない。直接殺人につながるものである。こういう日本山岳協会だったら、むしろ存在しない方がよいのではないか、という意見が、三重県山岳連盟の中で強く出たのも無理からぬところであった。今やザイルに限らず、登山用具に係わる事故防止は、重大な危機に立たされた。

事態は好転——鈴鹿での公開実験

この段階で驚くべきことに、事態は急転直下一八〇度方向を変えて、私たちの主張の方向へと動き出した。日本山岳協会は、四十七年十一月二十六日の理事会で、三重県山岳連盟の見解を支持することを決定、ついで四十八年二月二十八日、内外のザイル業者を集め、事故防止のため、ザイルの弱点を表示することを要望、ザイル業者はこれを了承した。（これら日本山岳協会の努力の中心は、前記K氏であった。K氏は、「岩と雪」に掲載した記事を反省していられるにちがいがなかった。これは登山界にとって大きなプラスであろう）。

三重県山岳連盟は、ナイロンザイルが岩角にきわめて弱いことは、今や周知となりつつあるが、百聞は一見にしかず、実際に切れる実験をこのさい公開すべきである、という決定をなし、四十八年三月十一日、鈴鹿工専においてザイルの実験を公開した（38頁参照）。

ザイルメーカー三社のほか、日本山岳協会は各地の山岳関係者、名古屋消防局、自衛隊レインジャー関係者ら約百三〇名が出席した。また日本山岳協会はザイル切断の瞬間を高速カメラに収めた。新聞、テレビ、ラジオは大々的に報道した。

事態はこのような好転したが、このことは私たちには十八年前から判っていたことである。私たちの懸命の努力にもかかわらず、ザイルメーカー、日本山岳協会等によって、生命に直接係わる事実が故意にゆがめられ、この間十名以上の生命が失われたのである。三十年当時、ナイロンザイルが岩角で弱い実験をくりかえし行ない、その後十八年間に、各地に散らばった岩稜会員から、公開実験の報道に対し、いずれも血をはくような怒りの書簡を、石岡のもとに寄せてきた。

生命に直結する矛盾

前記のごとく日本山岳協会は、内外のザイル業者に対して、今後ザイルを販売するさいには「ザイルが岩角で切れやすい」等を明記した説明書をザイル一本ごとに添付することを要望した。東京製綱と東京トップという日本のメーカーは、それを忠実に実行した。（前記のごとく東京製綱はこの段階でナイロンザイルの岩角欠点を表示した。とくに前穂高で切れ、蒲郡実験では九〇度、四五度の岩角でマニラ麻十二ミリの三倍以上強いと保証した八ミリナイロンザイルは、ザイルでなく補助用と記した）。

しかしながら外国のザイルメーカーは従来通り、ザイルの長所のみを示し生命に係わる弱点を表示しない（本国との連絡がうまくゆかない点もあるうが）。

また登山界にはザイルについての記述に矛盾が多い。たとえば四十六年十一月発行阿部和行氏の「新岩登り技術」には「ナイロン八ミリをドッペル（二重）で使うのが最良」と記してあるが（その部分を執筆したI氏からの書簡によれば、それは篠田氏の実験に基礎をおいたものである）、他方、東京製綱の新しいパンフレットによれば、既述したように「八ミリは補助用であり、たとえドッペルでも登高、下降を問わず一切使用してはならない。弱いのでは非常に危険です」と記してある（非常に危険なものが他方では最良となっている。こんな恐ろしい話は聞いたことがない。安全限界どころではない。またこの大きな矛盾は、もちろん蒲郡実験が生んだものである。東京製綱と篠田氏は、安部氏やI氏に対し、また一般登山者に対し、深く陳謝しなくてはならないであろう）。

また「岩と雪」二六号では、六ミリ以上がザイルとなっているのに、山崎安治氏、金坂一郎氏共著の「登山の基礎」では、九ミリ以下は補助縄と

なっている。このような混乱を防止するためには、ザイルの基準が必要となる。たとえば「岳人」は二六号で、また「岩と雪」は二九号で、ザイルの基準の設定を強く求めている。基準の作成は、日本山岳協会のなしうるところではない。協会は強制力をもたないからである。

ザイルの安全基準制定される

ザイル問題が起爆力になったかどうか分らないが、まさにこのときに、つまり四十八年六月六日、一般消費者の生命または身体に対する危害の防止を図るという目的をもつ、消費生活用製品安全法（法律第三二号）が制定され、登山用ロープ（ザイル）がそれに該当することになり、主務大臣（通産大臣）はザイルについての基準を作成することが義務づけられ、そのために約三千万円の予算が計上され、二十数名の委員からなる登山用ザイル安全基準調査研究委員会が発足した。その委員会で実験を通じての検討と審議を続けた結果、五十年三月五日に審議を終了し、委員会案を決定した。

この間、世界中のザイルが鈴鹿工専に集められ、基準作成のための実験が、通産省の係官を交えて連日行なわれたのであった。

また一方、基準の実施に備えて、神戸市にある通産省神戸繊維製品検査所には、工費七九〇万円を費やして、委員会案にもらわれているすべての項目を試験する装置が完成した。さらに四月二十二日、製品安全と家庭用品品質表示の審議会の答申を経て、六月五日付の官報に、ザイルの安全基準が発令された。法律による規制は世界で初めてである。ここにおいてこの基準に合格しないザイルは輸入も販売も出来なくなった。問題の岩角では、一五〇キログラムに耐えるザイルを合格としたが、一方この強度は、ザイルとして必要な強度の約八分の一しかないことが明らかにされた。ここで初

めて、ナイロンザイルの岩角欠点が、公けに明らかになったのである。それとともに今後の登山者の安全は、このようなザイルを安全に使いこなす登山者の技術にかかっていることが明らかにされた。これによって今後、ザイルメーカーは、岩角に強いザイルの開発に向けて努力し、登山界は、弱いザイルを安全に使う技術の開発と練磨に向けて努力するという、前穂高でのナイロンザイル切断事故以来二十年目に始めて、人間進歩の本来の姿に立ち戻ったのである。若山五朗の死はようやく生かされるところとなった。これは正しい解決と評価することができるところであろう。

ザイルの安全基準設定に関する報道は、新聞（英字新聞を含む）テレビ（スタジオ一〇二を含む）ラジオ等で大々的になされた。とくにNHKは年末に五十年度のスポーツハイライトを放映したが、その中で登山関係としては、女性のエベレスト登山とナイロンザイル事件が選ばれた。

「山日記」の訂正を目指して

ナイロンザイル事件の後半のうち残るは「山日記」の訂正だけとなった。ザイルの基準が出来た以前の四十九年九月、石岡は、日本山岳会「山日記」担当理事松丸氏に対し「ザイル事故が後を絶たないがその防止には三十一年度版『山日記』の訂正が必要であると考えている。私たちは、その点を昭和三十一年以降四回指摘し、また「岩と雪」や日本山岳協会の機関誌でも取り上げている。しかるに日本山岳会からは何らの返事もいただけない。ここに重ねて、日本山岳会が、三十一年度版『山日記』を、山岳遭難防止にとってマイナスになるおそれないように訂正していただくことを申し入れる」旨の手紙を書いた。

しかし日本山岳会は、この申入れに対しても何の反応も示さない。石岡は五十年七月、今西日本山岳会会長と、新しく「山日記」担当理事となっ

た皆川氏に対し、長文の申し入れを行った。ついで八月二十一日、三重県山岳連盟（速水会長）は今西会長に対し、事故防止のためには「山日記」の訂正が是非とも必要である旨を力説し、要求をくり返した。しかしながら何の返答もえられず、五十年も年末を迎えようとしていた。

遭難防止に関する申入れに関し、公的資格を有する日本山岳会が何らの反応も示さないということは、一般登山者を敵にすることと変わらないのではなからうか。

さてここでこの事件を、私たちの関係にしばって、もう一度ふりかえってみよう。私たちの山仲間、若山五朗の死因について、パーティのリーダー石原は「九〇度の岩角にかけた八ミリナイロンザイルは、わずか五〇センチの滑落で切断した」と発表した。それに対し篠田氏は蒲郡実験で、八ミリナイロンザイルは四十五度の岩角で、四九〇キログラムに耐えるという実験を公開した三十一年度版「山日記」に九〇度の岩角にかけたナイロンザイルは、一三メートルの落下まで耐えると発表された。ここにおいて私たちは岩稜会も、若山の遺族も犯罪的な虚偽者の仲間とみなされ、苦境に立たされた。とくに若山の遺族は、冷たい村人の視線の中で、死にまさる思いを強いられたのである。この重大な人権侵害の責任は、ザイルメーカーと篠田氏にあるが、篠田氏は日本山岳会の支部長である。また「山日記」は日本山岳会の機関誌であるので、その責任は当然、日本山岳会にもある。しかるに日本山岳会は、私たちの度重なる訂正申し入れにも何らの返答をなさず、「犬の遠吠え」と称して私たちが、くたびれるのを待っている。すなわち泣き寝入りするのを待っているのである。これがこれまでの経過の粗筋である。

さてそこで私たちは何をなすべきか、日本山岳会の思惑通り泣き寝入りすべきであろうか、それでは正論が屁理屈に負けたことになり、今後とも、日本山岳会はこの度にある度に悪徳企業に利用され、不当な人権侵害（一般登

山者の人命喪失を含む）が後を絶たないことにならう。泣き寝入りは、登山界のためにも社会のためにも、なすべきではないであろう。

今や日本山岳会が正道に戻り、登山界が、このような危害から救われるためには、私たちにとつての最後の手段、若山五朗の母（照尾七十九才）による名誉回復のための訴訟（亡父の遺言の実施）しかないのではなからうか。二十年の時効は、五十一年一月一日と迫っていた。私たちは若山の家族とも十分な打合せのうえ、十二月十一日、若山五朗の母は、今西会長と篠田氏に対し、十二月二十六日までに「山日記」が訂正されないときには、法的手続をとる旨の内容証明の書簡を発送した。しかしその後、依頼したM弁護士の研究から、この事件に時効は関係しないことが明らかとされた（時効は、被害が終了してから起算される。たとえば、「氷壁」を読み、前穂高でナイロンザイルが切れたのか、それとも結び方を誤ってザイルがほどけたのか、という点で疑問を持っていた一市民が——こういう人は多数いる——古本屋とか図書館で、三十一年度版「山日記」を開き「ナイロンザイルは九〇度の岩角でも麻ザイルの四倍以上強く、十三メートルの墜落に耐える」という記事を見て「やはりナイロンザイルは切れなかった、彼らは自分たちのミスをナイロンザイルに転嫁しようとしたのだ。ウソを言って世間をさわがせた罪は大きい。ザイルが切れなかったとすると、ザイルはほどけたのだろうか。遭難原因は何だったろうかというような疑いを持つ。つまり名誉毀損による迷惑は、二十年前に終了したのではなく、現在進行中であるという見解）。

皆川氏からも篠田氏からも、内容証明の申し入れに対する返事がとどいたが、訂正への具体的な動きは見られなかった。ただ皆川氏の書簡には「蒲郡実験は不備な実験方法にもとずくものであり、そのデータを『山日記』に記載したことは不適当であった」旨が記してあった。

石岡は、十二月二十七日、今西会長に面会して再び訂正をお願いをした

が、今西会長との話の中で、今西会長は蒲郡実験等に関し、いくつかの事実誤認をされていることを知った。そこで石岡は十二月三十日、三十一日、五十一年一月六日の三回にわたって今西会長および皆川氏に対し、今西会長の事実誤認を指摘するとともに、日本山岳会は登山界のために、正すべきは正すという姿勢に出られたいと懇請した。

五十一年一月、三重県山岳連盟は皆川氏に対し、五十年八月二十一日付今西会長宛発送した要望書の返事をいただきたいと、催促の手紙を出した。また墜死した五朗の兄で、現在若山家を相続している若山富夫は、蒲郡実験や山日記でぬれ衣を着せられ、苦しめられた当時の状況、とくに亡父の苦しみを数回にわたって、切々と日本山岳会に訴えた。

日本山岳会は一月、二月あたりの理事会で、山日記を訂正すべきであるという結論に達した模様である。ただ執筆者篠田氏の了解なしに訂正することは、著作権の侵害となるので、篠田氏に対して訂正に同意するよう、皆川氏から書面が送られたようである。

これに対し篠田氏から、四月二十九日付、皆川氏あて書面が送られた。私たちはそのコピーを入手したが、それは要旨「『山日記』の実験データは、蒲郡実験の実験データの二つである。蒲郡実験の目的は、二十九年から三十年にかけて、穂高で発生した三件のナイロンザイル切断の原因を究明するためのものである。岩角は、ロープに対し被削性を示すので、ロープは岩角で切れやすい。とくにナイロンは弱い。しかしながら被削性を示さない試験装置を用いて実験すれば、ナイロンは岩角でも非常に強い。『山日記』に記した実験データは、被削性を示さない装置によるものである。『山日記』を訂正したいということだが、誤りはどの点か教示されたい」というものであった。

要するに、国民の生命を守るべき立場にある篠田氏は、ナイロンザイルが通常の岩場でみられる九〇度の岩角で容易に切れることを承知していな

がら、山日記に、角を丸くした岩を使ってナイロンザイルは岩角で強いという、いわば殺人に等しい実験データーを記載されたのである。ナイロンザイルが岩角にかかったときの安全限界は、非常に低いことを承知しながら安全限界は高いと発表されたのである。

篠田氏は、ナイロンザイルは岩角で弱いことつまり石原報告は正しいとみなされることを承知しながら、ナイロンザイルが被削性を示さない実験つまり石原報告は正しくないとみなされる実験を発表したのである。

要するに篠田氏は、ここにいたってはっきりと、名譽毀損罪の成立を認められたわけである。篠田氏には、三十三年十月二十二日の声明のように、ウソを言うか、それとも今回の書簡のように、犯罪を認めるか、どちらかの道しかなかったのである。もしも篠田氏に言い逃れが出来るようなら、この事件の再発は防止されない。それは事件をウヤムヤにしたことになる。二十年間の追及は、ついにこの結着を導き出したのであった。このことは社会、登山界にとって祝福すべきことではなからうか。

石岡は六月四日、それに対する反論(二頁)を日本山岳会に発送した。その中で「三十年十一月十八日、私たち三名は阪大で篠田氏にお目にかかった。そのとき私たちは篠田氏に次の点を要望した。すなわち「三十年五月一日付の中日の記事とか関根氏の記事等から明らかなように、登山界にはナイロンザイルは岩角でも強いという誤解がある。また若山五朗の死因にも誤解があり、石原および若山の家族は非常に困っている。これらを解消するには、篠田氏から、ナイロンザイルは(角を丸くしない)岩角には弱い、と発表していただくことが必要である」と要望し、篠田氏は了承された。しかるに篠田氏は「山日記」三十一年度版で、ナイロンザイルは岩角で強いという、岩角を丸くした実験データー(被削性を示さない実験データー)を発表された。なぜ篠田氏は十一月十八日の約束を実行されなかったか。その点を篠田氏に問い合せてほしい」と強調した。

日本山岳会はこの時点で、篠田氏の了承なしに「山日記」問題を解決する方法について考え始められたようである。

日本山岳会の姿勢転換

その後石岡は、日本山岳会の代表者と面接し、長時間にわたって話し合った結果、すべての誤解がとけ、私たちの従来の主張は全面的に認められるところとなり、「山日記」問題は、急速にかつなごやかに解決に向った。

私たちとしては、当初、日本山岳会のお詫びの文章は、日本山岳会にも通知したが、次のものになるべきであると考えていた「当時、日本山岳会関西支部長であった篠田軍治氏は、昭和三十年一月、前穂高で遭難した岩稜会員若山五朗氏の死因に関する同行者の報告すなわち「九〇度の岩角にかけたナイロンザイルがわずか五〇センチの滑落で切断した」という報告は、正しいとみなされることを承知していたが、同年四月二十九日、愛知県蒲郡市のザイルメーカー東京製綱株式会社内で、面とりした実験用岩稜を使用し、ナイロンザイルは岩角でも強い実験、さらに若山五朗氏の死因はナイロンザイルの切断ではないとみなされる実験を特別に公開した。またそのときの実験データーの一つを日本山岳会の機関誌「山日記」三十一年度版に発表した。このため若山五朗氏の死因に誤解が生じ、家族を初めてする関係者に重大な迷惑が発生した。同時に、登山界にザイルの性能の過信にもとづく危険状態が発生した。

また日本山岳会は、三重県山岳連盟、岩稜会等から、事故防止のため、前記「山日記」の記事は訂正されなくてはならないと三十一年以降、幾度も指摘されながら、それを全く無視してきた。これらのことは、その後発生したザイルの切断に関連する登山者の遭難死の、一因となったものとみなされる。直接生命に係わる品物に関する性能の過信という事態は、遭

難防止の観点から絶対にあつてはならないものである。それにもかかわらず日本山岳会の支部長はその事態を故意に作り、また日本山岳会はそれを指摘されながら、訂正への努力をしなかった。これらのことは、遭難防止に關して社会的責任を有する日本山岳会として、きわめて遺憾であつた。日本山岳会は、今回の事件を深く反省し、このような不祥事を再発させないことを誓ふとともに、直接迷惑をおかけした方々はもとより、社会、登山界に対し深くお詫び申し上げる」というものである。

しかし日本山岳会の代表者から、表現を抽象的にしてはしい、内容はこれまで周知されていることだから、という要望があり結局次のものとなつた。そして十月十六日、東京赤坂のホテルニュージャパンにおいて、日本山岳会「山日記」担当理事皆川完一氏、常務理事近藤信行氏と三重県山岳連盟会長、若山照尾代理人、石岡繁雄との間で、覚え書に署名がかわされた。それは五十二年版の「山日記」に掲載されたものだが、次のようになつてゐる。「登山用具にかかわる事故の防止は、製造販売にたずさわる業者、登山の指導者および使用者がそれぞれ細心の注意をすることが必要である。昭和五十年、関係者の尽力により、消費生活用品安全法のなかに登山用ロープが取りあげられ、その安全規程が確立され、事故防止に役立つことになった。昭和三十一年度版「山日記」では、登山用ロープについて編集上不行届があつた。そのため迷惑をうけた方々に對し、深く遺憾の意を表する」。署名終了後、円満解決を祝福する乾杯がなされ、お互いの労がねぎらわれ、さらに夜明までなごやかに酒がくみ交された。そこにあるのは山の友情だけで、いかなるわだかまりもなかった。日本山岳会の代表者は、その立場上、解決のための大きな苦勞を強いられた、いわばナイロンザイル事件の私たちと同じ被害者なのである。

さてこの覚え書は表現が抽象的に過ぎ、説明を加えなければわからない。説明については、両者の間で何らの申し合わせもないが、日本山岳会との

交渉の経過からして私たちとしては次のようであると理解している。

この文は、三つから成つてゐる。第一は、登山用具にかかわる事故防止には、業者、登山の指導者および使用者がそれぞれ細心の注意をしなければならぬ。という点である。私たちは、この部分が、全体の中でもっとも重要だと思つてゐる。つまり日本山岳会としてはこれまで、前記K氏の「岩と雪」への発表にもみられるように、このような事態の中で業者の注意義務を一度も喚起したことがない（筆者の調査不足であつたならばお許しいただきたい）。それがここで初めて一八〇度の転換をみせ業者の注意義務を公けにしたのである。登山界として慶賀に堪えないところである。また次に「それぞれ細心の注意をしなくてはならない」の「それぞれ」がきわめて重要である。「それぞれ」が入つてゐるので、事故發生のとき責任の所在が三者の水かけ論とはならない。それぞれの責任区分に應じて、責任が追及されることになる。そのこと以外、遭難防止は成りたない。

次に「ザイルの安全基準が出来たので、事故防止に役立つ」と記してある。これは本件に關連して実に多くのことを示してゐる。たとえば、「山日記」の実験データは、九〇度の岩角でナイロン十一ミリは、五六〇キログラムに耐えているが、これは岩角が丸いときのデータであることを安全基準は示している。また蒲郡実験では、前穂高で切れた八ミリナイロンは四五度の岩角で十二ミリマニラ麻の三倍以上の強さを示したが、安全基準では、八ミリはザイルではなくなつてゐる。つまり日本山岳会の支部長が行つた蒲郡実験も、「山日記」の実験データも登山者にとって危険なものであつたことを、ここで示してゐる。

最後の、深く遺憾の意を表する部分については、私たちは次のようにうけとつてゐる。「編集上の不行届」というのは、三十一年度版「山日記」の編集委員が、篠田氏から受けとつた原稿の中に、岩角を丸くした実験データが含まれてゐることに気づかなかつたことに対する編集上の不行届

である。つまり原稿のチェックが十分でなかったことに對する反省である。次に迷惑をうけた人々とは次の人である。まず正しい事故報告を、故意に偽りとさせられた石原と沢田、また死因を疑がわれた若山五朗およびその家族、ならびに「山日記」の記事を信じ、ナイロンザイルは岩角でも強いと信じつつしかもわずかな滑落で、あっけなくザイルが切れて墜死した多くの登山者、である（ザイル切断と死亡との因果関係は、不明であるが、「山日記」の信頼性からいって、死亡者の大部分がそれに相当すると私たちは思っている。日本山岳協会発行「登山月報」第一八号に記してあるように、死亡者の中には、伝統ある山岳会に属する優秀な登山者が、多数含まれていた。つまり誤まれる安全限界内の死である）。深く遺憾の意を表する、ことのなかには、以上の人々に對するもののほか、「山日記」の訂正を合計十回ほど指摘されながら、二十一年間も無視しつづけたことに對する登山界並びに社会に對するお詫びが含まれている。

ともあれ日本山岳会は、消すことの出来ない汚点を、その歴史の中に留めることとなった。それにしてもどうしてこのような非常識なことが発生したのか。いうまでもなくそれは、死の商人の黒い影が日本山岳会に侵入したためであろう。この二十一年間、それを肌で感じるのである。

しかしとにかく日本山岳会が正してくれたことは、日本登山界の将来を明るくするものであろう。このような不祥事は二度と発生しないであらう。この点は日本山岳会の代表者も深く認識されていた。

ナイロンザイル事件を終って

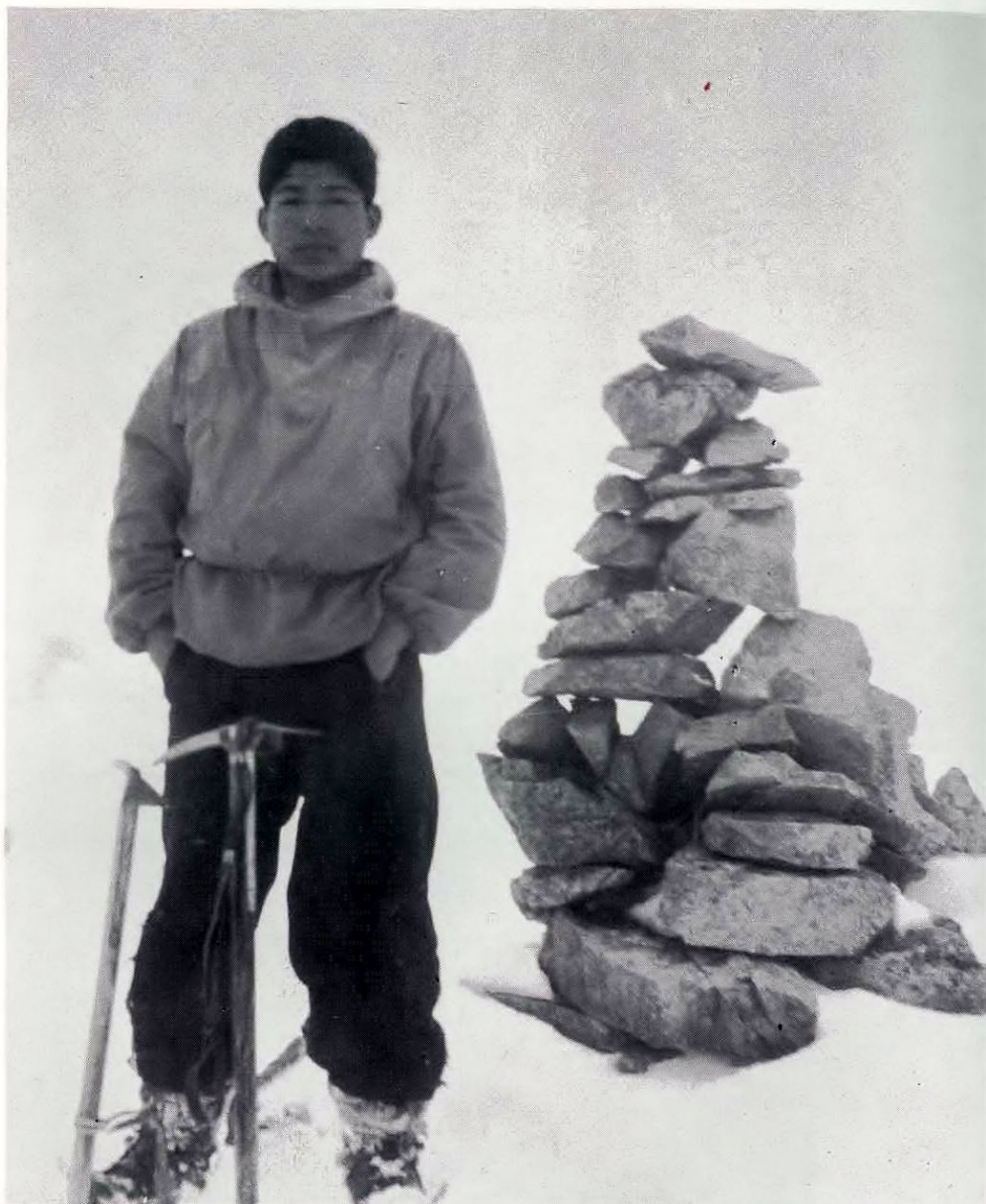
五十二年一月二日、愛知県海部郡の若山五朗の生家で（若山五朗はここから前穂高へと出発した）、二十三回忌の法養がしめやかに行なわれた。伊藤、石原、沢田をはじめ家族や親類が参列した。霊前には、数々の資料

に交って、五十年六月五日付、登山用ロープの基準を記載した官報、五十二年度版「山日記」それに五十一年十二月二十二日付朝日新聞、今日の問題「二十一年目の真実等」が並べられたが、とくに「山日記」の赤い表紙が、目にいたいほど鮮かであった。

その赤い色は、登山界と一般社会とを問わず、ナイロンザイル事件は、二度と起きてはいけないことを、訴えているようであった。

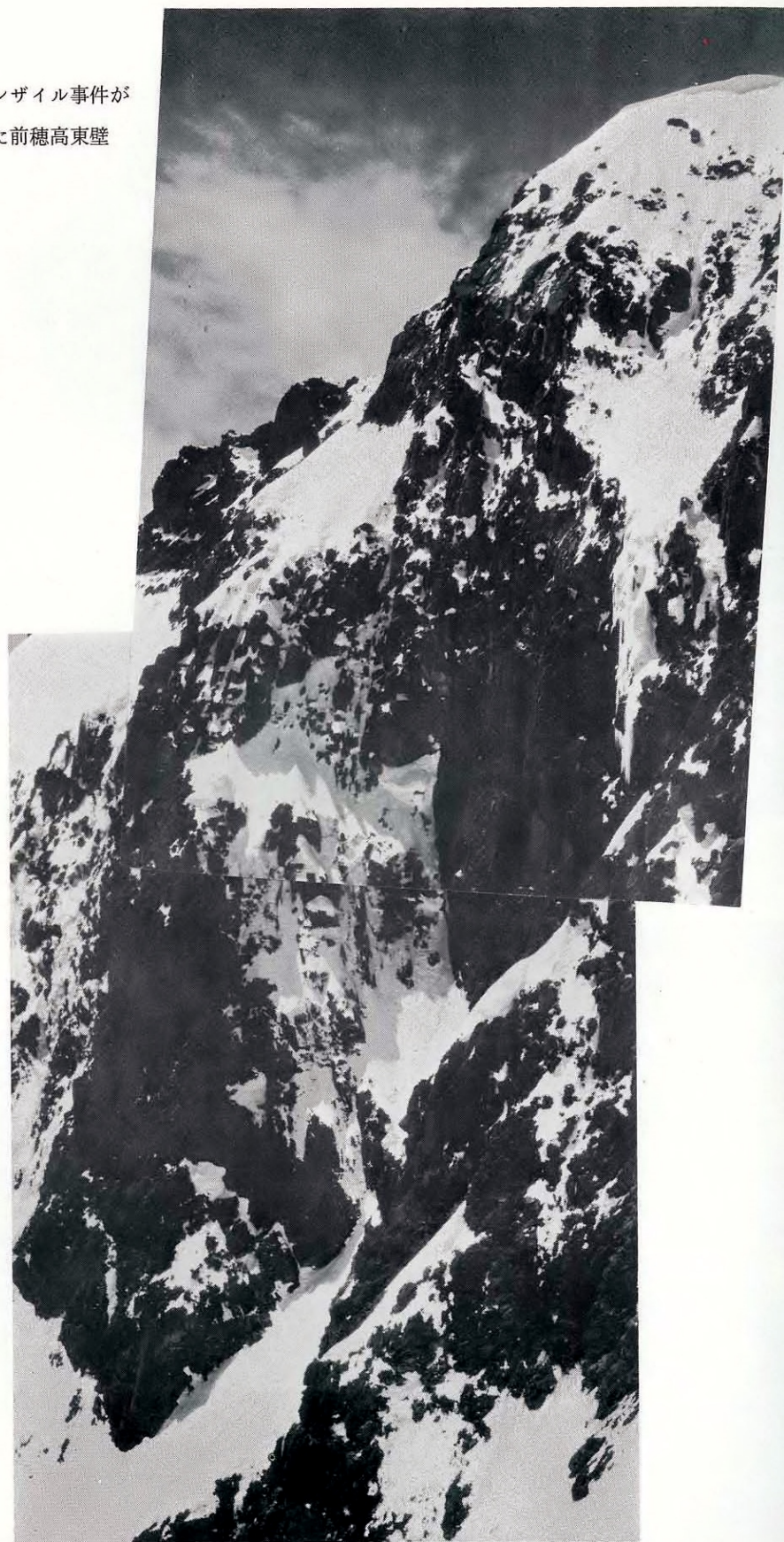
写

真



墜死した若山五朗（29.4.
前穂高頂上にて撮影）

ナイロンザイル事件が
発生した前穂高東壁



又白テントから前穂高を臨む

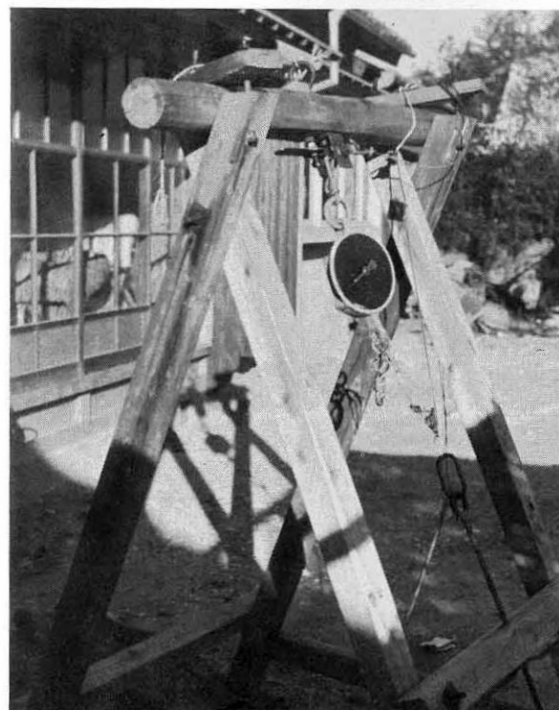


遺体収容作業 (30.8.8.)



若山を残してテント撤収 (30.1.4.)

石岡が作ったザイルの小規模な実験台 (30.2.)



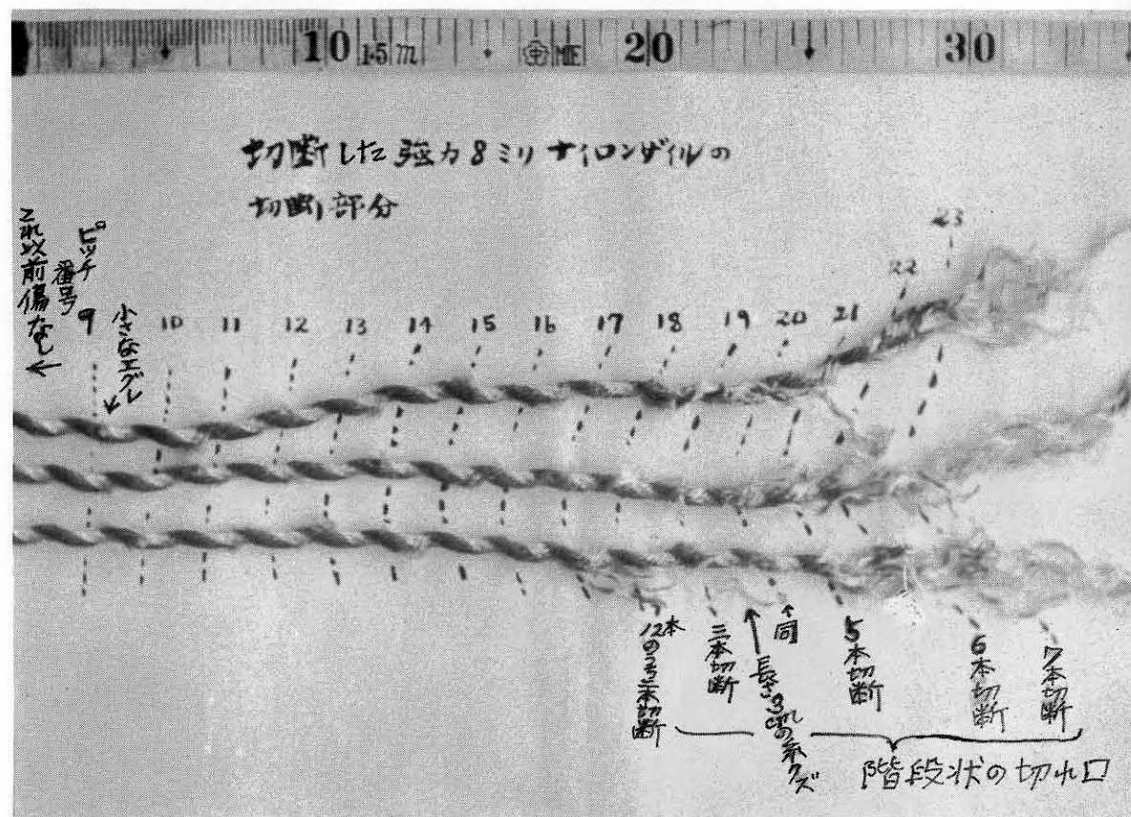
凍傷の沢田を背負って下山する





ナイロンザイが切断した岩角の石膏 (30.8.6.)

ナイロンザイルの切れ口 (階段状をなす)



遺体に結ばれていたナイロンザイル (30.8.3.)

切断した岩角を下から見上げる



事故現場、チョークは若山が最後に足をおいた点(30.8.6.)



の山々では吹雪、なだれ、

サイマルのせ
に絶対の信頼
山下のサイロ
ロンザイルの
実兄の石岡繁
断による資料

ほとんどなかったシヨック

いけんど

結論得るまで使用中止を

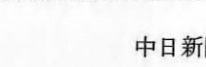
布地の構造が
く用をなさな
ら考へてある
ザイルは偽証
相雑品ではな
の不安をいだ

究明

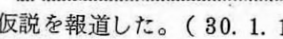
得る

血の分子構造
ザイルが鋭い
れた場合はザ
い。岩を登る
のないよう
ないが、この
たといふとい
使つてそのま
がある程度の
こは登山調
の服装だとい

「結晶として溶媒中から析出する。結晶をもちて溶媒に溶けないこのように、ロンザイルの構造も起きたら二つの科学的な検討が必要だ」と思っている。



中日新聞はナイロンザイルの岩角欠陥の仮説を報道した。(30. 1. 11と12)



テストに供された。テストは九十度と四十五度の角度を持つものがかれた花こう岩のエッジおよびカラボナを使用しての衝撃試験が廿一種、廿度の斜面をスライディングした場合、花こう岩

エッジに対するもの一種。同エッジ上で猴子を利用したストローク三種など廿八種類のケースについて行われたが、まず角度九十度のエッジに対するマニラ麻十二¹/₂はエッジからの長さ二¹/₂層の綱の先端に五十五¹/₂の分銅をつけ一層の高さから落¹/₂させたと¹/₂ころ実にあつけなくぶつたりと切斷してし

蒲郡 T製綱で画期的試み

保地点に何ら弾力性を持たせなかつたにせよ、余りにも面白いの
に居合せた中京山岳会副会長熊
沢友三郎、東京在住の有名登山
家海野治良氏らは「あつ」と願
々のんだほどだった。

これに対しナイロン・ザイル

は十一で長さ三層五十坪のもの
をエツツの上一層のところか
ら落ト(四層五〇落ト)させて
はじめて切断するという麻に教
倍する強力さをみせた。鋭い工

あゝだったが、いずれ写真史は八ッのナイロン・サイ

いたこともわかり、麻とナイロンの強度もはつきりしたにわがた。しかしこの試験でナイロンがあらゆる場合いといきることにはできず、麻も確保地点を支点から、方法も身体や綱自信の度を利用したジッヘルングをすれば相当の強度を

写真田は九十度のエッジ②から長さ三層の麻ザイルに五十五分の調①をつけウインチで巻きあげ、ザイルを一層たるませてウインチを外し落下させる直前

発見がもたらされると思われる。なおこの設備は各山岳会員たちが外国製のもの、現在使用中で年数を経たものなどテスト

研究することになるのだ。それによって登山界に新しい

A key to solve this problem lies on the difference of the mechanism of fracture. At a rope which is broken by sudden fall, abrasion due to longitudinal

—40—

(33. 4. 3)

穂高の滝谷でクラック尾根にアタックしていた神大の山岳部員二人（当時三重大一年・愛知県海部郡佐織町）石原国利氏（二七）名大なか点があるのか、それが、ザイルが切れて転落死亡する学生課勤務・当時中大生）らがア疑惑に答えるようなラフア

麻の二十分の一の強度

放出のザイルに要注意

二、三の麻
ストの結果をみよ。一端を固定
し、一端におもひたるしたザイル
五度の角
を、三角スリの上に張る。そ
ッ(これ
して三角スリは五度の往復運動
をする。おもりが十の場合、十
ニの麻ザイルは三百四十回から
三百千回の往復切れる。これ
に対しナロン十二は三百四十
四回、ハバは二百四十回から
四百回いれり切断す。落下物
は岩面に接觸しないで使用するこ
とが可能に近く、岩場ではイ
ロソは切れやすい。溝部でナス

状態である。その岩角にかけテ
イロソ・ザイルは、麻ザイルより
はるかに堅固にいわね。山でザル
を岩面と接觸しないで使用するこ
とは可能に近く、岩場ではイ
ロソは切れやすい。溝部でナス

ものじまでもよく解しているもの
が多。
渡谷で遭難し神大の両者は出
発時、名古屋市内の某登山員店
で、この放出ザイルを購入し
た。その店主のO氏は「一巻登
りに使つてはけのない」と注意
したところ、渡谷ではこんな状
態であつたことが判明した。しかし
非鉄金のテストだが抗張力十二
といわれる放サザイルが、単なる
一般の鋼索のみでは切ないとい
ふ。

(金井)

三、ナイロンザイルの件

三重県岳連提出のナイロンザイルに就いての全岳連研究委員会

全岳連第5

全岳連第 5 号は東京製綱の陳謝を報道した。
(33. 6.)

山の装備 41

いかといわれていたが、実際試験してみると[90°]の岩角にかけて12mmのマニラでは $H/L = 0.3$ という小さな衝撃で断ずるが、11mmのナイロンでは 1.3 までもつことがわかった。但しこれは 55kg の錘を落した時のことで、Hは錘を上げた高さ、Lはザイルの垂れ下った長さであって、ザイルに及ぶ衝撃力は H/L が大きいほど大きい。マニラでは 10m 垂れ下ったザイルの一端に人が結ばれてゐるとして、3m の高さから落せば切れる怖れがあるが、ナイロンでは 13m までもつということである。もっともこれは自由落下の場合で、急斜面でのスリップでは摩擦その他で落下速度は余程少ないのでこの数字よりは遙かに安全なものになる。このようにマニラのザイルは衝撃には弱いが、これ以上強いものでは人体の方が衝撃に耐えないので太くしてもあまり意味はない。

中日新聞は石原の告訴を報道した。
(31. 6. 24)

ナイロン・ザイルの実験に
事実をまげて発表

前穂登頂
リーダー
篠田阪大教授を告訴

楠田平治教授

高橋にまうとて原道雄、熊神龍
高校〇品中の森山ミチヲ特異科
代表者へ勧告市新町、伊藤野郎
氏の依頼で、昨年一月二日北
ア別荘のロッジ・マイニング
作つたといふ。諸君、山五明彦
〇品中二十一巻ノ愛國思想を佐
藩司親裁、三井支分本部一年一
が頂上層の給役で足るのみす
したとき、ザイルを効能、輕便発
するに上に出づゝ。因言
は當時の事故の原因につき「使
用したザイルは東京鐵道車ニ準
で作った」。〇三〇〇の抗張力を

るのではなくかかと強弱した
この二回も、ナロン・イ
ル切畑にも通算表が掲いで
深き地生れたものラッパで物
證を提出し、「薩田一面が腹究
明を出す」旨責、それに依
な誘はるゝカ力の東京鐵道を
爲提、同年四月一日、白土園
係者が立ち立、湖端へ公開談話
とてこの二つの疑では、遺跡防止
の罪疑はらば、然れ通算環境、ある
いはして上へ通過条件で決まり
せねばならぬに、ザイルのかか

名譽手損と
はおかしい」
福田博房語、これは支部の
裏面だけの事で、英文でも全
部出たのである。
會の席上、問題に及ぶの名義
とはいはれて、名譽手損とは
しも、わづかに一種純然的
な問題で、私學堂は歐州に
より發して日本に於けるとい
今般に日本による又は出
しないの中間點に在る點は
ない」と論ずる。

宣言

日本山岳会関西支部長・大阪大学教授篠田軍治博士は、昭和三十年四月二十九日愛知県蒲郡市東京製鋼株式会社内において新聞記者登山家等多数の面前で、昭和三十年一月二日北アルプス前穂高岳で発生した登山者墜死事件の原因究明に關する公開発表をされたが、同発表において篠田教授は、一、その立場上、登山者の危険防止を充分考えられなくてはならないのにナイロンザイルの重大な欠点を熟知しておられながら、その欠点が全くないという錯覚をおこさせる発表を行なわれた。

死因並びに遭難状況発表に關し、遭難報告者石原國利にかけられている重大な醜行容疑が無実であることを承知しておられながら、觀察に、この容疑が事実であると錯覚をおこさせるような発表を行なわれた。へ石原の名譽毀損罪による告訴)

我々は右を確信する。かかる疑惑がそのまま放置されるときは、今後、生命尊重、人権擁護の精神が侵されることになると思ふので、疑惑解消の日まで追求する。

印刷物「ナイロンザイル事件」の
冒頭に揚げた「宣言」

昭和三十一年七月一日三重県鈴鹿市岩稜会

—42—

—43—

東京都 市田谷区深沢町一〇四七
告訴人 石原 國利
名古屋市 東正布池町五番地
右代理人 井護士
全所 三十二番地
右同 木林 健
大阪府 豊中市 麻田九七
被告訴人 篠田 軍治
名誉毀損罪の告訴

篠田軍治氏に対する告訴状

三、ナイロンザイルの件
三重県岳連提出のナイロンザイルに就いての全岳連研究委員会の研究発表依頼の件は、尾関副会長仲立ちとなり岩稜会伊藤経男、伊達忠雄両氏と共に再三東京製綱社長及び高柳麻綱課長等と会見、接渉の結果東京製綱は岩稜会に対し、新製テリレンザイルを贈り、一切の事に就いて深甚なる陳謝の意を表したので円満解決した。

朝日新聞も同上の報道をした。
(50. 4. 24)

(大阪新南)
(33.10.21.)

岩稜会の
伊藤氏の
訴訟も決意

この事は昔年、月王ザ
アルスの前、三重奏夫若臣
君が議決、何故イル初めた
か知らぬ、と、同年冒末、
カザンメ、と、四年冒末、
株式社、若知開閉市、の依頼
で、日土、開閉市、と、

[illegible]

産経新聞は鈴鹿工専での公開実験を報道した。
(48. 3. 12)

犠牲者の兄 石岡教授が実証

「**譯**」ナイルンザイル戦争、にはまだギリオドは打たれていなかった。井上靖氏の小説「氷壁」のテーマにもなった「ナイル」。

そのきつひとなつた當時の陸死大元帅の愛子ト專一の遺教を授け十日二庫と論じし故を指すといふことと、同じし取り組んだナチオンザルの確證をはた公開願をし、その結果、乃ちナチオンザルはナチリ。教授はあのマヤカはナチリを改訂すと訂

この事柄は、日本でも工部省理官の田淵繁一が『給用神河河』、さる三年一月日、同刊の山崎ルツ樹松氏の會員で同僚のルツ、若山祐君の時三十二年が、北、即座満の難を誅ふ、ナチオンザル、乃ちナチリに転落死ス。論、ナチオンザルは従来の天竺雜書資料とに比し、より鮮く丈夫、云々

結句、西文の「ナイロブ
 サイル」は皆同様に「ナイロブ
 メカ」側を指し入る。サイ
 ルの定義については表示され
 ず、明確めりかされてい
 る。石岡さんの研究は「二
 つに別れたが、結句は「二つ
 」「ナイロブサイル」は「二
 つ」に別れた。

岩角になだた美談がザラ(笑印)で土のうもろろい、
ロノ(閉眼がういてい)をばして遠ナスト

は、切れてゐた。

「エノケンザルは石〇〇の勢力は弱められなへ、九段の岩にあつて急流に下る。わがニ〇〇、前後の刃を切れた。ニ〇〇といふは、体面ツキの人が三割ちたゞで加ふる。是等こいた山家も、命綱としては非常に弱くも、命綱としての必要はない。石門教はヌカにはたんのものではない。それでは同じく、いかにあらわれたい。クレーマーも、命綱を二度考へ直し直して、と氣遣ひを添へてゐた。」

前穂の岩場で切斷、墜落

昭和三十年一月二日。前穂高峯を登山中の三重県・岩槻会サイルバーレーターの若山君（当時三十八年）が岩場でスリッパ、約五、六センチ滑落したところ、ナイロンザイルが90度の岩角で切断され、墜落死した。当時、新製品として登場したナイロンザイルは、それまでの麻ザイルの数倍は強いとされ、急激に普及していた。ところが、あまりにもおそろしき切れなさにこの事件の発端がある。名大電気工学科出の石岡氏は、遭難現場と同じ条件を作り、引つ張りテストを行い、岩角に弱いことを確信、新聞雑誌に掲載した。が「遭難原因をザイルに転嫁した

のでは「扱い方が悪かった」など、さまざまな説が飛んだ。

そこでメーラーの東京滞録から顧問でもある阪大の篠田重治教授の指揮で公開実験をし、結果は岩角でも麻の数倍は強い。事故原因はサイル以外にあると発表した。しかし、その実験が、岩角を丸く削ってあったことがわかり、石岡側は篠田教授を名誉毀(き)損で告訴した(31年6月)。

その後、再三の公開質問状を突きつけたられた篠田教授は、結局「事実したのは船舶用で登山ロブと無関係」と声明を出し三十五年、石岡側勝利の形で一応決着。しかし、メーカー側は穴陥について一切示そうとしないまま十年がたった。四十五年六月、東京と新潟でテイルンザイル切断による死亡事故が発生、論争が再燃する。石岡氏は、こんどは三重県山岳連盟として問題を提起し、全日本山岳連盟、日本山岳協会を動かす、国に腰を上げさせた。四十八年製安全協会がスタート。その一環として「登山用ザイル安全基準調査研究委員会」が発足した。

後手に回った義務づけ

通商船は三十三、事故に遭ったのは岩田屋ザイル、金剛バット、ローラースケートの三品目の安全基準をつくり、それにババしたS（安全）マークつき製品しか売ってはならないことを、メーカーに義務づけることを決めた。昨年三月の圧力ガマ、野球ヘルメットなど五品目に次ぐもので、ねらいは

50. 9. 24.
朝日

組船品物賣、いまだで、安金権
が疑はれた體で、おねがなつ
くり使ひに盡した刑罰にたつて
は、事は、ひと強みといつたど
ころだ。

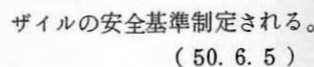
それにして、三品のうち、
幾も活罪故にながかりすい登
山岸サルにいはは、もつと早

かメカキは山界のかつ
点も表示して死れたこの葉も
よくつけてきて、この十年
に、百回さんの調では、サイ
切斷事故は十五年生じ、十六
も死んだ。

それに「生齒の調」そのものの
に、なせこんな長々讀ま

く腹割れもなかつたが、
「厭ひも憎みも強ひ」と保証
付き「新島のヒロインサルが、
岩崎まであつたならわのちまにプ
ツツと切れ、山着者が死し、井
上露地の小説「死者」の「イマに
もたぬ事故が規定」は昭和
三十一年のことで、死んだ山着
の兄、石岡謙進さん（動物園専教
授）から「ナオロサルは逆
角に属し」との筋が描かれて
いたのに、メーヤも字も「そ
い」などとはない」と笑つた。し

てきの如く、二十年前には
僅か一言もあらず、すでに金
儲け、サルも飼ひて、私生活
その線になつたのです」と、
金満家の、生みの親、石岡謙之
いう。しかし、消費無類の世
が高まるをみせされた、この終
でさえ、サイルは「つねにい
てはばりを張ってきた。そのの
に、失れてい」登山者の命を
メーヤや通連智の望は六
通連者の話聞簡短、スポツ



51.12.9.

遭難関係者の 真実追及実る

「山日記」編纂委員會

21年ぶりに『訂正』を出した山日記

朝日新聞はナイロンザイル事件の結着と52年度版「山日記」のお詫びについて報道した。(51.12.9)

ナイロンザイル事件関係事項の年表

年月日

事項

1865・7・14

ウィンパー等七名、マッターホーン初登攀の下山に際してザイル切断、四名墜死、ザイル切断原因究明のためのスイス政府の委員会設立等、ザイル事件発生する。

昭28・8・20

「山岳」第四八年、金坂一郎氏は確保論で、ナイロンザイルは麻ザイルの数倍強いという記事発表する。

29・

東洋レーヨンパンフレットに「命の綱」という見出しで「電気工夫が用いるナイロンの安全帯はガサガサの電柱とか金属性の桁の縁ともすれあうが、ナイロンは普通の帯の三倍も強い」と記載する（後述のヤスリ実験と逆のデータ）。

29・6・25

「登山技術と用具」西岡、海野、諏訪多三氏共著で「ナイロンザイルは麻の欠点をすべてカバーしている。太さが細くなり軽くなるから有難い」と記載する。

29・8・1

「山と溪谷」諏訪多栄蔵氏執筆「ナイロンザイルが優秀であることは万人の認めるところである。まず軽くて強い。このことは岩登りはもちろん、積雪期登山において実に魅力である」と記載する。

29・12・

岩稜会の責任者石岡繁雄は、運動具店主熊沢友三郎氏からハミリナイロンザイル八〇mを購入する。

29・12・28

東雲山溪会員一名、穂高明神岳で墜落重傷、九ミリナイロンザイル切断。

30・1・2

岩稜会員三名（石原、沢田、若山五朗）前穂高で遭難、若山墜死、ハミリナイロンザイル切断する。

30・1・3

大阪市立大学山岳部員一名前穂高で墜落、軽傷、一一ミ

昭30・1・11

30・1・12

リナイロンザイル切断する。
石岡は、中日新聞に岩稜会の遭難状況の詳細とナイロンザイルの岩角欠陥の仮説を発表する。

前記熊沢氏は、前記沢田に「ザイルは切れたのではなくて、結び目がほぐれたのではないか」という意味の書面を送る。

30・1・13

朝日新聞は、石原、沢田の体験談を発表する。

30・1・15

朝日新聞「今日の問題」の欄で「切れたザイル」という見出しで「原因を徹底的に究明せよ、保証付ザイルとは何を保証したかを明らかにせよ」と発表する。

30・1・17

NHK第一放送「私たちの言葉」で若山五朗の父は「息子は新製品の試験台となって、あたら若い生命を失った」と全国に放送した。

30・1・30

石岡は、名古屋大学工学部土木教室で、ナイロンザイルがエッジにきわめて弱い実験を行なう。

30・2・9

日本山岳会関西支部主催のナイロンザイル切断検討会開催される。日本山岳会関西支部長大阪大学教授篠田軍治氏は、原因究明のための研究に着手することを表明。石岡、名大土木研究室で行った実験を発表する。

30・2・

石岡は、木製架台のザイル実験装置を製作。エッジを紹介しての衝撃実験を行う。

30・3・1

「山と溪谷」と「岳人」は、岩稜会の遭難状況とナイロンザイルの岩角欠陥の仮説を発表、「岳人」はその記事に「世にも不思議な出来事」という見出しをつける。また「山と溪谷」は、篠田氏の実験を予告する。

30・1・31

東洋レーヨンと東京製綱の代表と若山五朗の遺族との会談、決裂する。

3・上旬

昭30・3・24

全日本山岳連盟は、機関紙で「ナイロンザイルの切断の原因が判明するまで一時使用を停止されたい」と発表する。

30・4・20

三重県山岳連盟に、蒲郡実験見学の案内が寄せられ、加藤富雄理事が出席することとなった。

30・4・24

日本山岳会関西支部で篠田氏と石岡、伊藤経男会見。篠田氏ナイロンザイルの岩角欠点を認める。

30・4・29

愛知県蒲郡市の東京製綱KK内で篠田氏指導によるザイルの実験が公開される。

30・5・1

中日新聞は蒲郡実験を詳細に報道「ナイロンザイルに岩角欠点はない。ハミリナイロンザイルは、前穂高で切断しなかったとみなされる」と発表する。

30・6・1

「岳人」蒲郡実験を報道する。

30・6・29

「毎日グラフ」蒲郡実験を報道する（内容に矛盾あり）。「山と溪谷」は「ザイルメーカーは科学テストによってナイロンザイルを保証した」と発表する。又、熊沢氏は

30・7・1

同誌で「ザイルの切断の原因は、指導者があまりにもザイルの知識を知らなすぎたからだ」と発表した。

30・7・1

雑誌「化学」で早稲田大学助教関根吉郎氏は、「登山者は自分たちのミスをナイロンザイルに転嫁した」と発表する。

30・7・20

三重県暁学園機関紙「鈴峯会」第二号で加藤富雄氏は、篠田氏が三〇年二月以降、東洋レーヨンで行ったヤスリ実験（ナイロンザイルは麻ザイルの一桁弱い実験）の詳細を発表、又蒲郡実験でナイロンザイルが強かったのは

昭30・7・31

岩角を丸くしたからだと発表する。

若山五朗の遺体、前穂高東壁下のB沢で発見。遺体には切断したハミリナイロンザイルが結ばれていた。八月三日茶毗に付す。

30・8・4

新村橋のたもとで加藤富雄氏と石岡の会話。石岡は前記鈴峯会の記録を知る。

30・8・6

伊藤、石原らナイロンザイル切断の現場を調査する。三種のナイロン繊維束を発見、また岩角の石膏をとり、位置関係など計測をする。

30・9・1

岩稜会、巨木による実験を行ない、蒲郡実験の誤りを証明する。

30・9・1

繊維機械学会誌は「三十年七月二八日、東京製綱は、蒲郡工場見学会で学識者五十名にナイロンザイルだけが苛酷な条件でも切れないという実験を見せた」と発表する。岩稜会、ザイルに関する見解（現場調査、巨木による実験等の報告書）を作成する。

30・9・9

30・10・17

名古屋大学における昭和三十年秋季応用物理学連合講演会で篠田氏、ザイルに関する講演を行う（蒲郡実験のスライドを行う）。

30・10・21

中日新聞、篠田氏の講演を報道する。

30・11・10

山崎安治・近藤等氏共著「積雪期登山」で「ナイロンザイルは非のうらところがない」と発表する。

30・11・18

大阪大学にて篠田氏・新保正樹氏と石岡・伊藤・沢田の父・会見する。

30・11・26

毎日新聞は、岩稜会が行った現場調査、巨木の実験などを報道する。

昭30・12・19
30・12・24
31・1・1
31・1・1
31・1・1
31・3・24
31・4・10
31・6・24
31・6・28
31・7・1
31・7・1
31・9・1

篠田氏は石岡への書簡の中で「ナイロンザイルは石原報告の条件で切断する」と記載する。
岩稜会臨時総会。ナイロンザイルの岩角欠陥を明らかにするためと石原の名誉回復のため、篠田氏と訴訟含みの交渉を行うことを決定。また石岡は岩稜会を退会し伊藤が代表となる。
「岳人」は「岩場におけるナイロンザイルの使用について」を発表する。内容は、前記三〇年一月二十六日の毎日新聞と同様。
三年度版「山日記」発行される。篠田氏は「ナイロンザイルは九十度の岩角でマニラ麻ザイルの四倍以上強い」と発表する。
岩稜会は、東京製綱と篠田氏に、内容証明の書簡を送る。大阪大学工学部発行の欧文による論文集に、篠田氏ほか二名のザイルに関する論文発表される。蒲郡実験のデータは前穂高の事故原因にとって重大な矛盾を持つものであると記載する。(40頁参照) 篠田氏は蒲郡実験のデータが、事故原因の究明にとっても登山者の安全にとっても矛盾を持つことを承知しながら、それを権威ある「山日記」に発表された。
石原は篠田氏を名誉毀損罪で告訴する。
朝日新聞・毎日新聞・中日新聞・国際新聞およびNHKは、告訴を報道する。
岩稜会、印刷物「ナイロンザイル事件」を発行する。
前穂高山麓の若山五朗茶毗の地に、ケルンを建てる。
日本山岳会会報(一八七号)で、金坂一郎氏は、篠田氏

昭31・9・
31・9・1
31・10・1
31・11・
31・11・22
31・11・23
31・12・
31・12・11
31・12・21
32・2・25
32・3・25
32・4・14
32・5・2
32・6・6

が東洋レーヨンで行ったヤスリ実験を発表する。
石岡ら井上靖氏と会い、ナイロンザイル事件をモデルとした小説の作成に協力することを約束する。
「山と溪谷」に加藤富雄氏の鈴峯会二号の記事が掲載される。
井上靖氏の小説「氷壁」、朝日新聞に連載始まる。
三重県山岳連盟は、奈良県吉野で行われた全日本山岳連盟の評議員会に、ナイロンザイル事件の解決を求める緊急動議を提出する。
緊急動議のこと朝日新聞に発表される。
「岳人」に、石岡が三十年一月三十日と三十一日に名古屋大学土木教室で行った実験とか三十年九月一日に行った巨木の実験など掲載される。
若山五朗の父は「ナイロンザイル事件をウヤムヤにするな」という遺言を残して病死する。
「氷壁」大映から映画化される。
石岡、伊藤、石原は、大阪地検で斉藤検事に会う。
名古屋大学法学部長信夫清三郎氏は、が二七氏から、斉藤検事あて要望書提出される。
石岡、大阪地検にて斉藤検事と会う。斉藤検事、慎重調査を約束する。
石岡、伊藤は、朝日新聞専務信夫清一郎氏と会う。
週刊朝日に、「ナイロンザイル事件」という見出しで二頁掲載される。それに「蒲郡実験と前穂高での遭難とは無関係」という篠田氏の談話が発表された。
朝日新聞信夫専務、ナイロンザイル事件の解決のため大

昭32・6

阪大学で篠田氏に会うも失敗に終る。
雑誌「インダストリー」にナイロンザイル事件に関する記事二頁掲載される（偽りの内容を含む）。

石原の告訴、不起訴と決定される。

朝日新聞は不起訴を発表する。

三重県山岳連盟は、全日本山岳連盟尾関副会長にお願いして、東京製綱に対して文書で申し入れる。

斉藤検事は、石原に「不起訴理由の告知について」という公文書を送る。

篠田氏に対する第一回公開質問状を送る。

弁護士正木ひろし氏他多数の方から公開質問状に対する激励の手紙をもらう。

「山と溪谷」社川崎隆章氏から「あくまで貴会を支持しますのでご健闘下さい」という書簡をもらう（「岩と雪」Iに掲載）。

中日新聞笠井亘氏（三十年五月一日の記事を書いた人）から、事件を大いに追求していただきたいという書簡をもらう（「岩と雪」Iに掲載）。

石岡は、雑誌「講座」第二号に「前穂高に弟を失う」を発表する。

神戸大学山岳部員二名、穂高岳で墜死。ナイロンザイルが切断していた。

横浜税関山岳部機関紙「樺火」に、植木知司氏の記事発表される。

岩稜会は、中日新聞に対して文書をもって、三十年五月一日付蒲郡実験の報道の誤りに関する申し入れを行う。

昭33・4・3

33・5・1

33・6・

33・6・14

33・7・1

33・10・

33・10・16

33・10・22

33・11・7

33・11・16

中日新聞は、「篠田氏は、ナイロンザイルは岩角で弱いことを承知しながら、角を丸くした岩を使って、前穂高で八ミリナイロンザイルは切れないとみなされる実験を公開した」と発表する。

「山と溪谷」に岩稜会は「ナイロンザイル事件」という見出しの記事を発表。検察当局の判定は、重大なミスであることを強調する。

全日本山岳連盟機関誌「全岳連」第五号は「東京製綱が、岩稜会に対し、新製テリレンザイルを贈り、一切のことについて深甚なる陳謝の意を表した」と発表する。

朝日新聞は、ナイロンザイルはわずか五十センチのずり落ちで切断すると警告する。

石岡は、「岩と雪」Iに「ナイロンザイル切断事件の真相」を発表する。

大阪大学学生部長森河敏夫氏はナイロンザイル事件の解決に努力されたが成功せず。

岩稜会、二回目の公開質問状を送る。朝日新聞・産経新聞・読売新聞・大阪新聞等に大々的に掲載される。

篠田氏の「蒲郡実験はグライダーや船舶の実験である」という声明がNHK、ラジオ・新聞等で報道される。

第三回公開質問状を送る。十一月十二日の朝日は「岩稜会、篠田氏に対し公開の席上で話し合いを」という見出しで「公開質問状を送った」と報道する。

東京中日新聞は、「篠田実験に重大欠陥」という見出しで、約四分の一頁を使って「ナイロンザイル事件」を詳細に報道する。

昭38・11・25	「岩と雪」Ⅱで石岡は「その後のナイロンザイル事件」を発表する。
33・12・	「ナイロンザイル事件」関係の資料が長野県大町市、山岳博物館に展示される。
33・12・20	大町市立山岳博物館機関誌「山と博物館」で、海川庄一氏は「ナイロンザイル事件」を詳細に発表する。
33・12・22	石原らは、篠田氏に対し、蒲郡実験に関し謝罪広告することを内容証明で催告した。
34・7・30	梶原信男著篠田氏監修の「ザイル・強さと正しい使い方」が発行される。蒲郡実験のデーター六四種類発表される（しかし、この書には重大な矛盾がある）。
34・8・30	「ナイロンザイル事件に終止符をうつにさいしての声明」（二十頁）を発表する。とくに朝日新聞は、七段抜きで報道した。石岡 岩稜会に復帰する。
34・9・12	三重県山岳連盟は、「ナイロンザイル事件論争を終止するに当って」（五頁）を発表する。
34・10・4	アサヒグラフに「ナイロンザイル論争果てて」を二頁に発表する。
34・11・1	「岳人」は、「電気器具とナイロンザイル」という見出しで岩稜会の終結声明の一部を紹介する。
36・10・8	泉州山岳会員一名穂高で死亡。ナイロンザイル切断する。
38・7・16	法政大学山岳部員二名剣岳で墜死。ナイロンザイル切断する。
38・8・11	サンデー毎日は「ナイロンザイルの紛争がウヤムヤに片づけられているうちに、またしても遭難が起った」と報道した。

昭41・6・	「岩と雪」二九号によれば、某大学山岳部員一名奥多摩で墜死。一一ミリテトロンザイル切断する。
43・8・	通産省資料によれば、穂高岳でザイル切断（ザイルの種類記載なし）。一名死亡する。
45・4・1	「山と溪谷」は、特別レポート「ザイルの特性」を発表。それに示された新しい実験データーは、東京製綱蒲郡工場に設置された、丸い岩角の実験装置にもとづくものであった。
45・6・14	雲表クラブ会員一名奥多摩で墜死。抗張力二・七トンの一一ミリナイロンザイル切断する。
45・6・14	東京電力山の会会員一名巻機山で墜死。抗張力二・七トンの一一ミリナイロンザイル切断する。
45・7・	通産省資料によれば、奥多摩で四メートルの滑落でザイル切断。（ザイルの種類記載なし）。一名死亡する。
45・8・1	ザイルメーカー東京トップKKは、角を丸くしない岩を用いたザイル実験を公開する。新聞は大きく報道した。
45・12・	「岩と雪」は「ザイルが安全限界と考えられている範囲で切れてしまったらどうなる」という見出しの記事を発表する。
46・1・1	石岡、山岳雑誌「山と仲間」に「思い出の事件」を発表。蒲郡実験の性格とともに日本山岳会に対して「山日記」の訂正を強く訴えた。
46・11・1	「新岩登り技術」阿部和行氏著で「八ミリナイロンザイルを二重で使うのが最良」と発表する。
47・6・	三重県山岳連盟、「昭和四十五年六月十四日に発生したナイロンザイル切断による死亡事故の原因と、今後同種の

昭47・10・1
 47・9・15
 47・10・15
 47・11・1
 47・11・23
 47・11・26
 47・12・1
 47・12・1
 48・2・1
 48・2・28
 48・3・11
 48・4・2

事故を防止するために必要な措置についての見解」を発表。朝日新聞は二回にわたって掲載した。

「岩と雪」は、三重県山岳連盟の見解を掲載した。

日本山岳協会機関誌「登山月報」は、三重県山岳連盟の見解を掲載する。

朝日新聞は、十月三十一日北アルプス槍ヶ岳で二遺体発見。ナイロンザイルが切断していたと報道する。

石岡と笠井幸郎は、電子装置を使用したザイル実験装置を製作し、ザイルに関する各種実験データーを発表した。

朝日新聞は、全国に報道した。

日本山岳協会の理事会は、三重県山岳連盟の見解を支持する決定をする。

「岩と雪」は、石岡らのザイル実験の詳細を発表した。

「岩と雪」で日本山岳協会常務理事K氏は、「三重県山岳連盟の見解に反対である。ザイルメーカーは、ザイルの欠点を発表する必要はない」と発表した。またザイルメーカー東京トップK.K.の村井葵氏は、三重岳連の見解を全面的に支持した。

「岩と雪」で三重県山岳連盟は、K氏の論文に反論した。

日本山岳協会は、内外のザイル業者を集めて、ザイルを販売するさい、ザイルに「ナイロンザイルは岩角で弱い」等を記したパンフレットを添付することを要望する。

三重県山岳連盟は、鈴鹿工専において各種ザイルの公開実験を行った。参観者約一三〇名、各新聞、テレビは大々的に報道する。

毎日新聞社は、ユニチカの田川高司氏のザイル実験（ナ

昭48・6・6
 48・7
 48・7・30
 48・10
 49・9・14
 50・3・13
 50・4・22
 50・6・5
 50・7・7
 50・8・21
 50・10・25
 50・11・11
 50・12・11

イロンザイルは、岩角できわめて弱い」を報道する。消費生活用製品安全法（法律第三一号）が制定され、登山用ロープが同法の対象となった。

東京製綱株式会社のザイルに添付されるパンフレットには「ハミリナイロンは二重でも岩登りには使ってはいけない。弱いので非常に危険です」と記載する。

石岡は、シャモニーにおけるフランス国立スキー登山学校において、ザイルの講演を行なう。

石岡は、名古屋大学電気学科卒業生の会報FUTABAに「ナイロンザイル事件」を発表。著名大学学長をはじめとする名士多数から、激励の手紙をもらう。

井上靖氏一行、前穂高山麓にある若山五朗の墓に詣でる。登山用ロープの検定のための試験装置、神戸繊維検査所に設置される。

石岡、スタジオ〇二でナイロンザイル事件を説明する。

登山用ロープの安全基準、官報で公布される。

岡崎市在住のY氏、石岡に蒲郡実験の内幕を明らかにした書面を送った。

三重県山岳連盟速水会長は、日本山岳会今西会長に対し、三一年度版「山日記」の訂正を要望する。

蒲郡実験を参観された加藤富雄氏は、石岡に蒲郡実験に関する新事実を語る。

岩稜会会員および故若山五朗の肉親は前穂高山麓の若山五朗の墓に詣でる。朝日新聞およびNHKテレビはこれを取材した。

若山五朗の母照尾、日本山岳会会長今西錦司氏および篠田

昭 50・12・27

50・12・28

51・4・29

51・6

51・10・16

51・12

51・12・22

52・1・14

軍治氏あて「山日記」の訂正を要求する内容証明の書簡を発送する。

石岡は、今西会長を訪問し、「山日記」の訂正をお願いする。

NHKは、五十年代「スポーツハイライト」でナイロンザイル事件を放映する。

篠田氏から日本山岳会皆川理事あてに書簡発送される。登山用ロープの耐候性調査研究委員会発足する。鈴鹿工専の実験装置によるテスト始まる。

日本山岳会「山日記」担当理事皆川完一氏・日本山岳会常務理事近藤信行氏および石岡は、ホテルニュージャパンにおいて、三十一年度版「山日記」に関する覚え書に署名した。

日本山岳会は、「山日記」五二度版で、「山日記」三十一年度版記載の登山用ロープに関して遺憾の意を表わす。

朝日新聞は、「今日の問題」の欄で、「二十一年目の真実」という見出しで「ナイロンザイル事件」の概要を発表する。

日本経済新聞「私の履歴書」の欄で井上靖氏は、「氷壁」と「ナイロンザイル事件」との関係明らかにする。

ナイロンザイル事件報告書

昭和五十二年七月 非売品

発行者 鈴鹿市神戸新町四四二

伊藤 経男 方

岩 稜 会

印刷 名古屋市中区筒井町二ノ一

中京プリント合資会社

(電話) 九三五〇二〇一

(許可なくして転載を禁ずる)



夏山のシーズンは終わったが、今夏もザイルの切断による死に事故があった、相かわらずザイルの強度と使用法についての問題が残された。人命に直接関係することだけに、ザイルをつくるものと使用するものとの虚心に検討すべきであるにもかかわらず、朝日新聞八月八日の朝刊の記事にあるように、その原因についてザイル業者と登山者の意見が完全に分れていることは重要な問題である。

今夏の事故は七月十四日に鈴鹿の御在所で麻ザイルが切れて一人死し、さらに二日おきの十六日には剣岳でナイロン

ザイルの強度を明示せよ

ザイルが切れて二人死した。ザイル切断事故の占めるパーセントは小さくないし、しかも事故をおこした登山クラブはいずれもヒマラヤ連邦の経験をもつ日本でのトップクラスであることが、問題を一層深刻にしている。

ザイルの切断事故を防止するには、第一に、ザイル業者がザイルの性能を明らかにすること、第二に、登山者がその性能にあった技術の研究してそれを身につけることが必要なのである。それにもかかわらず、ザイルの性能そのものが明らかにされていない、あるいは故意にあまりに隠れているというのをさえない状況にある。

いつも長所だけ強調

研究しようがない登山技術

ザイルには墜落のショックで体重の何十倍という圧力がかかることがある（とくに麻ザイルはナイロンザイルに比してショックに對してはなほ弱い）。また墜

落の途中でザイルが岩かごにかかると切れやすくなる（たとえば、ナイロンザイルでは一ト以上のひっぱりでなせるザイルが五十キログラム以下で切断するようになる）。ザイルが岩かごにかかった場合の弱くなる度合は、麻では小さく、ナイロンでは大きい。しかしザイル業者は、ザイルの性能のうち、長所についてはいつも強調するが、欠点については、それが実験室で明らかにしている場合でもその結果を決して公表しようとはしない。かりに発表する場合でも実に抽象的な表現で、登山者にはほとんど役にたかない。

ザイルの性能があまりにであれば、それに対する技術といつものもは考えようがない。たとえば、ザイルは新しいければよいとか、二本使つべきとかいっただけになるわけである。また、ナイロンザイルは改良されていて、むしろ強すぎるくらいだといえは、一般の登山者は、ナイロンザイルは切れるものではないのかのような印象を受ける。しかし、もし改良されたのであれば、ショックの点では何%

岩かごの欠点で何%強くなったと、テストの結果が発表されなくてはならないが、そういう発表はきいたことがない。

テストの結果が発表され、その長所・短所とも明らかにされれば次の段階として、登山界は衆知を集めてザイルを切らないように使うための技術とか登攀（トウパン）の限界といふものを研究することになる。ザイルを無理な状態で使えば、みずからの生命を失うことになるので、これらのことは真剣に行われるはずである。ザイル業者にとくに望みたいことは、氷壁「以来のいさごを水に流して、登山者の生命を守るために率直に協力してもらいたい」とである。

（田岡繁雄一投稿）

筆者は岩稜会会長、山稜会員（旧制八高山部OB）、日本山岳会東海支部副支部長、四十五歳。